

訂每
高等女子讀本
卷五

3759
MeJ
資料室

42126

教科書文庫

4
810
42-1908
200030 2297

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

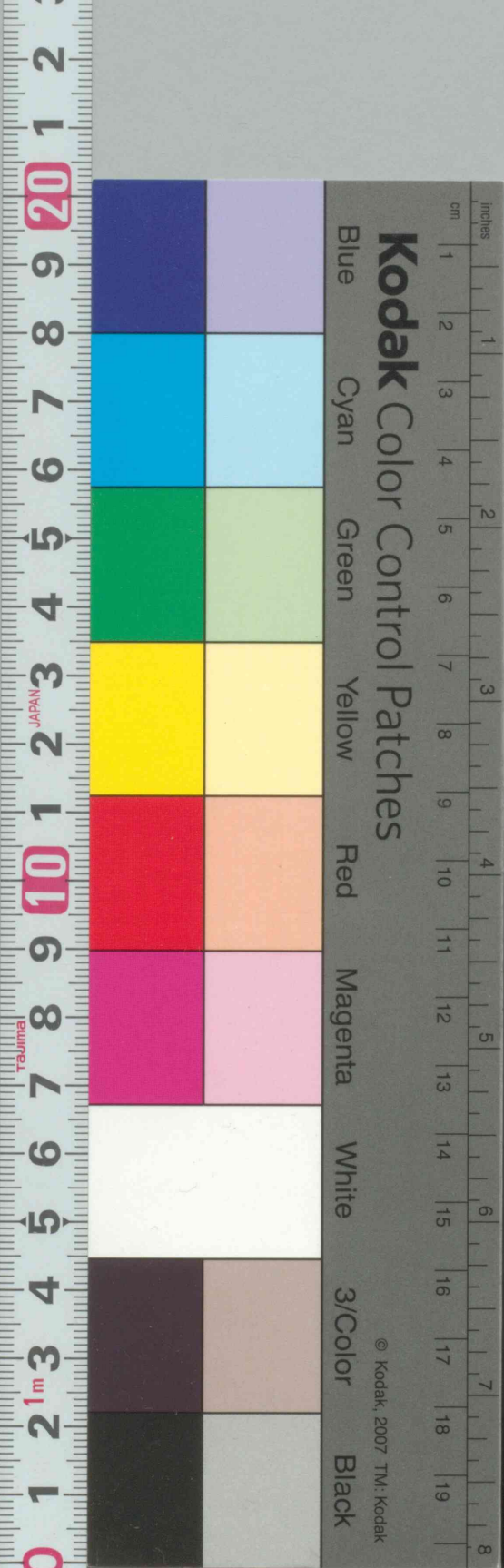


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Me9

資料室

明治四十二年二月四日

文部省檢定

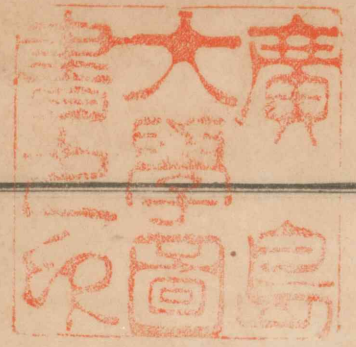
師範學校高等女子學校國語科用

佐藤 球 校訂

明治書院編輯部編

訂再高等女子讀本

東京 明治書院



訂再高等女子讀本卷五目次

一、	花くらべ	一
二、	四季の月(今様)	九
三、	書齋(口語)	一一
四、	讀書三則	
一	讀書の樂	一五
二	讀書の時	一六
三	讀書の心得	一七
五、	貝原益軒	一九
六、	格言	二三

再訂高等女子讀本卷五目次

七、 勇氣の源……………二四

八、 獨立戰爭……………三一

九、 北米合衆國國旗……………三五

一〇、 星と花(新體詩)……………四四

一一、 名將の文事……………四五

一二、 江戸のなりたち……………四九

一三、 螢……………五二

一四、 長良川の鵜飼……………五八

一五、 夏の樂……………六二

一六、 泰西女學生の休日……………六四

一七、 和蘭……………六九

一八、 休暇日記……………七四

一九、 胡枝花……………七九

二〇、 花すゝき(短歌)……………八二

二一、 東北行幸の記……………八三

二二、 禁庭の野分……………八七

二三、 坤德……………九一

二四、 衛ノ靈公夫人ノ明察(譯文)……………九六

二五、 スエズ運河……………九七

二六、 太平洋(新體詩)……………一〇五

二七、 洋式造船術の起原……………一〇六

二八、 威海衛陷るその一……………一一一

二九、威海衛陷る その二……………一七

卷五目次終

再訂高等女子讀本卷五

一、花くらべ

さまざまの遊戯あるが中に、昔大宮人のせられけむ、花合にならずらへて、花くらべといふ遊戯をものせむも、みやびたるわざなるべし。その方法は、まづ、十人の數なりと、假定すれば、これを、左五人、右五人と分ちて、別に、一人の判者を定む。さて、左右は、各、かはりたる、細きリボンを結びて、胸につけて、標とし、かねて、定めおきたる、一番・二番の番號の

花合
菊合

標
印

特所
長所
特徵

批判
判定
品評

名を呼ばるゝ毎に、左右より、各、このみの花の枝を持ちて、席上に出づ。かくて、各、その花の特所をいひて、劣らじ、負けじと、争ふなり。かくて、左右の人の、そのいはむと欲するところのもの、を、いひ終りたる時、花は、かねて、定めある臺、又は、廣蓋の上に置く。判者は、これを見て、批判の詞を下し、左を「勝」とか、右を「勝」とか定め、或は、左右、ともに、優劣なしと、認むる時は、「持」と定むる等の事もあるなり。その一・二の例を、左に掲ぐべし。

一番左、八重櫻

左方の人は、左の八重櫻を持ち出でて、判者の方に向ひて、座の中央に立つ。

右、牡丹花

右方の人、亦、右の牡丹花の枝を持ちいで、左方の人と、相ならびて、判者の方に向ひて立つ。

さて、左右、ともに、一禮すれば、左方の方は、右方の人に向ひて、曰はく、

我は、實に、櫻の花を愛す。櫻は、即、我が國の名花にして、外國には、絶えて、その比を見ず。さればこそ、歌にも、やまに、心に比して、朝日に句ふ、山ざくら花とも、詠まれたれ。實に、うらくくと、長閑に、晴れ渡れる朝、高嶺に咲きにほひたる櫻の、朝日に句へるは、何かは、これに若くものあらむ。まして、九重の殿の守と、えらび植ゑられたるも、此の

朝日に句ふ
敷島の大和心
を人とはばあ
さ日に句ふ山
櫻花。
句(句)

比類
比倫

上なき、花の名譽ならずや。いかに。

右方、また、誇りかに、牡丹の枝を指し示して、曰はく、

御身は、櫻を以つて、我が國の名花なり、外國に比類なしと、いはるれども、今、學問の道開けて見れば、外國にも、絶えて、無しとは、いひがたし。況、その咲く時は、麗しけれども、嵐もまたで、心短く散るは、耐忍の力に乏しといはるゝ、我が民生の缺點にも似て、あまりに、面白からず思はる。それよりも、我が愛する牡丹花は、「花中の王」、「富貴の花」と、稱せらるゝ程ありて、花輪の大なる、その枝ぶりの雅なる、實に、見るからに、うち笑まるゝ心地して、いと、めでたからずや。さればこそ、楊貴妃も、この花に、わが容姿を比

楊貴妃

名は太真、唐
玄宗帝の寵
姫。

べて、その美を誇れりと、いふ。さもあるべし。我は、櫻の、盛

短からむよりも、「二十日草」と呼ばるゝ牡丹花の、盛久し

きが、勝れりと、覺ゆ。いかに。

左方、曰はく、

御身は、牡丹の富貴なる名に迷ひて、我が國の名花を、おとしめ給へど、國を傾け、城を傾けたる妖婦楊貴妃が擧に倣ひたるも、忌はしからずや。まして、その香のうとましさ、餘りに、大きな花のさまのこちたき、到底、櫻の、優美、高尚なるに、比ぶべくもあらず。殊に、わが手折れる八重櫻は、伊勢の大輔が、

いにしへの、奈良の都の、八重櫻、

伊勢の大輔
大中臣輔親の
女、後一條天
皇の中宮に仕
ふ。

いにしへの
詞花集に出
づ。

紫の君
源氏物語中
の名。

今日九重に、にほひぬるかな。
と、かしこき御前に奏せられたるも、面正しく霞の間よ
り、つと、匂ひこぼれたる、紫の君によそへられたるも、な
つかし。かくても、猶、牡丹花を、優れりと、争ひ給ふか。

右方、なほ、曰はく、

おほけなくも、畏き御前わたりを引出でて、花にとりな
し給ふは、卑劣ならずや。殊に、八重櫻は、一重の山櫻とい
ふものよりも、更に、雅致なく、趣味なし。恰、店頭に商ふ造
花の簪の如く、紅粉、厚らかに、粧ひたる田舎娘の如く、櫻
は、八重に至りて、いよく、その價值を失ふものと、いふ
べし。我は、富貴の名に眩するにあらず。富貴の眞價を貴

卑劣
陋劣

輝
耀

ぶなり。強兵も、また、富國ならざれば、能はず。強兵ならざ
れば、何とて、國威を輝すことを得む。嗚呼、富貴、富貴。富貴
の花。去かも、盛久しきは、まことに、深く、頼むに足るべし。
左方、曰はく、

倣
傲

辯
(辨辯)

然り。御身も、自、いへる如く、兵の強きは、何によるか。即、將
卒の、死を視ること歸するが如く、櫻の散りかた、潔きが
如きに、倣へばなり。我が國の名花、櫻の心を以つて、武士
の心とす。また、潔からずや。
かく、雙方、辯論終結する時、判者、立ちて、批判して、曰はく、
大和心の、花に匂ひいでたる櫻、富貴の色に富める牡丹、
その花のさまも、主の詞の文も、いづれをいづれと、優劣、

花は櫻木人は武士

我が田に水

譏

誹謗毀訾証

勿

勿論勿體

更に、わきがたけれども、猶判者が古代なる心には、花は櫻木、人は武士」とかやいひけむまゝに、君の爲、國の爲に、死をだにも辭せざる、日本男子の潔き働を見聞くにつけても、猶、その基たるべき、富源造らむの心を、忘るゝにはあらねど、目の前の潔きがうれしさに、大和心の花を以つて、勝れりとは、定め置きてむ。我が田に水の譏も、いかずはせむ。

判者の批判終れば、左右、ともに、一禮して、勝の方の人は、臺の上にあげたる、我が八重櫻の枝と、負方の出したる牡丹の枝とを、持ち歸りて、かねて、用意しておきたる左方の花瓶にさし、右方勝ちたる時は、勿論、左方の出したる花を取り

て、右方の花瓶にさすなり。此の如くして、終結し、花の枝を、多く、取りたる方を、勝方とす。下田歌子—女子遊戯の琴

二、四季の月(石川依平)

うめ咲く園に、霞みつゝ、

峰のさくららの、花ぐもり、

くもりもはてぬ、おぼろ夜の、

月こそ春の、ひかりなれ。

まだしきほどの、ほととぎす、

はつ音まつ夜の、まくらより、

なれて涼しき、月かげに、
閨の戸さゝで、あかすなり。

桐の葉わけに、影見えて、

秋とほのめく、ゆふべより、

たち待ち居まち、待ちとりて、

いく夜か月を、ながめけむ。

木の葉ふりあぐ、山の端の、

時雨にくもり、霜にさえ、

雪に照りそふ、月かげを、

などすさまじと、思ふべき。

三、書齋

齋(齋齋)

勉
力努勤

不淨
不潔

書齋は、なるべく清潔にし、且、嚴肅に保つことが、肝要であります。固より、書齋は、朝に夕に、或は、書き、或は、讀むことを、する處でありますから、書冊・筆・墨の類の、縦横散亂することを、免れないのであります。あかしながら、成るべく、筆・墨・書冊等、悉、その處を得て、よく、整頓し、勉めて、亂雜を誠めねばなりません。

殊に、有形・無形の、不淨を避くることが、必要であります。それといふは、書齋は、主人公に取つては、その頭腦の次で

惡
憎惡
善惡

穢
汚瀆

あります。單に、頭腦の次であると言つただけでは、一寸、分り悪いでありませうが、斯様に言うたならば、分りませう。吾々の頭腦の中には、いろ／＼の觀念が、往來するものであります。それが、少しく、吾々の頭腦を、嚴正に保たうと云ふならば、一切、嫉妬、猜疑、憎惡、瞋恚、その他、不正、不善の觀念を一掃し、純潔にして、些の、汚點をも著けぬやうに、せねばなりません。肉體は、他の動物と同じく、不淨を免れないにしても、少くも、ただ、この頭腦を以つて、寸毫も、不淨に穢されず、徹頭徹尾、嚴正なる状態を、存するといふことは、徳性を涵養する者の、第一に、力むべき所であります。書齋は、即、頭腦の反射であります。書齋の状態如何は、その主人公

現
顯表露

滿
充

の、精神状態の如何を、現して居るものであります。書齋を、亂雜ならしめて、一向、平氣で居るといふやうなことならば、矢張、その精神の状态が、さういふ有様であるのであります。

精神状態が、亂雜に堪ふること能はず、悉、正確に、悉、純潔ならしめようといふ觀念を以つて、滿されて居りますれば、その書齋の状态も、これに相應する様になつて來ると云ふは、必然の結果であります。又、その書齋の中に、如何なる書類が、陳列してあるか。その愛讀して居る書類は、如何なる性質のものであるか。高尚なるものであるか。野卑なるものであるか。若、極めて、野卑なる小説、及び、その他、蕪雜

嗜好
好尚

由
依因

なる雜書類であれば、矢張、それは、その主人公の嗜好を、現して居る。若又、その書類が、哲學・宗教・文學・科學などといふ、高尚なる方面のものでありますれば、矢張、その主人公が、さういふ嗜好をもつて居るに相違ない。書齋の内の有様に由つて、主人公の性質が、わかる譯であります。書齋の有様は、主人公の精神の、反射であります。

ですから、主人公の頭腦の中、すなはち、精神が、純潔でなければならぬやうに、書齋も、また、純潔でなければならぬ。純潔にして、かつ、整頓されたる書齋の中に於いて、眞に、趣味ある、秩序ある讀書が、爲し得らるのであります。(井上哲次郎—學生寶鑑)

四、讀書三則

一 讀書の樂

讀
樂
句讀
娛

凡の事、友を得ざれば、爲し得べからず。唯、讀書の一事は、友なくて、ひとり、樂むべし。一室の内に居て、天下四海の内を見、天地萬物のことわりを知り、數千年の後にありて、數千年の前を見、今の世にありて、古の人に對し、我が身おろかにして、聖賢にまじはる。これ、皆、讀書の樂なり。およそ、萬のことわざの内、讀書の益に、よく事なし。然るに、世の人、これを好まず。その不幸、はなはだし。これを好む人は、天下の至樂を得たりといふべし。(貞原益軒—樂訓)

二 讀書の時

憶(慮)億

若き時は、書を讀むに、三つのよきことあり。氣強くして、書を多く讀みても、疲れず、是、一つなり。暇多く、妨なくて、書を多く讀み易し、是、二つなり。年若く、氣盛なれば、記憶強くして、覚え易し。是、三つなり。此の三つの事、書を讀むによし。又、年たけて後、書を讀むに、惡しきこと、三つあり。一つには、既に、君につかうまつりて、司る所あり。人の交繁くなり、家の事、又、多くして、書を讀むに暇なし。二つには、年、やうやく、たけぬれば、氣弱くなりて、勉めて書を讀むこと難し。三つには、三十より後は、年々に、記憶よわくなりもてゆけば、少年の時、一たび讀みて、覺ゆる程の事を、年たけぬれば、十

司
主掌

少
妙、鮮

たび讀みても、覺えず。是を以つて、幼く若き時に、早く、書を

讀むべし。



貝原益軒

もろくの藝は、年たけても、習ひ易し。只、書を讀むことは、年たけては、記憶よわく、氣力少く、暇すくなし。此の故に、幼き時より、まづ、藝などのことわざは、おろ

そかにしても、專、勉めて、書を讀み習ふべし。是、一生の寶となるなり。(貝原益軒—文訓)

三 讀書の心得

喻
警
周匝
周到

同時に、多數の師に従ふと、同時に、種々の書を読むと、其の不利、相似たり。かの雜誌類の濫讀の如きは、私立學校を流れわたるに喩ふべし。人の姿したる師を選び、友を選ぶには、用意の周匝なる者、古今に、尠からず。書の姿したる師友に至りては、全然、選ぶことを爲さずして、親炙し、自、惡感化を招致して、悔いず。怪むべきにあらずや。

紀(記)
俟
待

讀書は、方法を要し、又、節約を要す。各専門の書の、各、一大圖書館を成すに足る廿世紀は、濫讀を、學者の最大過失とす。悉書を讀まむとするの妄なるは、言を俟たず。廣く讀まむと欲するだにも、無信、無歸著に終らざるを得るは、稀なり。選擇と、方法とは、讀書家が、刻下當面の必需なり。或種類

必需
必要
必須

他山の石
詩經に、他山
之石、可以
攻玉。

の書は、齒をくひまばりても、讀までおく、克己、忍耐を要す。これ、正に、學者的勇氣の一側面なり。

同氣相求むる書は、急ぎて、讀む必要なし。むしろ、我と反對なる書を、繙くべし。他山の石のためしなり。おのが非をおほふ料を、書に求めて、我が短を増長する非を知らぬ者の、あさましきよ。(坪内雄藏—文藝と教育)

五、貝原益軒

貝原益軒、嘗、湊川を過ぎて、楠公の昔を追想し、公の事蹟を、片石にあるして、永く、後世に傳へむとて、兵庫の富商に謀りしに、大に、贊しければ、碑文を撰びて與へたり。こゝに、

俄 遼 稿

僭越 踰等

中年 壯年

富商は、うち喜びて、石工にも謀りてありしに、益軒、俄に、その文藁を、とりにおこせたり。文章の改削にもやと、そを返ししに、やがて、また、いひ送りけるやう、余、思ふに、楠公の勳功、日月にもくらぶべきに、余の如き、淺學の筆もて、碑文を記さむは、僭越なれば、この事は、思ひ止みね。龐忽なることを約せし罪は、許し給へ」と、いふ。益軒の篤實にして謙遜なりしこと、この一事を以つても、知らるべきなり。

益軒、姓は、貝原、名は、篤信、通稱を久兵衛といへり。筑前の藩醫寛齋の子なり。幼より、群兒のなす遊を好まず。ひたすら、讀書を嗜みぬ。中年に及びて、京都に講學し、後、醫とならむ志を起せり。

陸王 宋の陸象山、明の王陽明。 裨益 補益 利益

令聞 名聲

はじめ、陸王二氏の説を喜びしが、後、朱學に歸したり。心術

はじめ、陸王二氏の説を喜びしが、後、朱學に歸したり。心術をもて、後世に裨益せむと欲し、聊も、名利に馳せず。故を以つて、著書數百部、假字がきのもの多し。その見識、人の及ばざる所なり。益軒、子なし。兄存齋の子を嗣となす。正徳四年、享年八十五にて卒しぬ。益軒、令聞、一世に高かりしかど、常に、恭謙にして、身の及ばざる事を恐れ、吾無長人者、唯、恭默思道而已」と、いへり。

起 鐘山 王前公

終日看心不厭山買

山終待客山有止

花屋冬山長 在

山多室依山自來

いすお見原を



旁
傍側

嘗、海路より、筑前に歸る時、同船せる數輩、思ふがまゝに、語りて、日を過ししに、一人の少年あり。旁に人なきが若く、揚々として、經義を講説してやまず。益軒は、恭黙、座隅に居て、これを聽き、更に、一言をもちださず。かくて、客船、湊につきたりし時、各、その姓名、郷貫を告げけり。かの少年は、貝原久兵衛と名乗れるを聞き、大に、慚愧して、其の名をもちはず、いづこともなく、遁げ去りきとぞ。

句句

益軒、儒學の外に、殖産興業の事にも、志あつく、農耕、本草の著書も、また、少からず。詩をば、無用の閑語なりとして、多く、賦せざりしが、歌は、折にふれて、詠み出でたり。文章も、字を鍊り句を修むるは、儒者の文の主とするところにあらずとて、辭の達するを以つて、要とせり。其の卒せむとする時の歌に、

來し方は、一夜ばかりの、心地して、

やそぢあまりの、夢を見しかな。(本朝傳記)

六、格言

- 一、人ノ惡ヲ言フハ、己ヲ美ニスル所以ニ非ズ。人ノ枉レルヲ言フハ、己ヲ正シウスル所以ニ非ズ。(孔子家語)
- 一、善人ト居ルハ、芝蘭ノ室ニ入ルガ如シ。久シウシテ、其ノ香ヲ聞カズ。不善人ト居ルハ、鮑魚ノ肆ニ入ルガ如シ。久シウシテ、其ノ臭ヲ聞カズ。(孔子家語)

一、咆哮スル者、必シモ、勇ナラズ。淳談スル者、必シモ、怯
ナラズ。(抱朴子)

七、勇氣の源

日露戦争のはじめには、吾妻艦長にして、後に、第二艦隊
の參謀長たりし、藤井少將が、「勇氣の源」と題して、學習院に
て、談話せしことの大要が、某新聞に記載せられたるが、今、
その中より、要を摘まむに、

藤井少將
較一
刺
刺激
刺客

戦争は、勝つことが目的なり。勝つには、幾多の必要な
手段あるべけれど、余の考には、勇氣が、最、必要なりと、
信ず。その勇氣も、外の刺激に基づくもの多し。固より、先

負傷
怪我
戦死
討死

東郷大將
平八郎
上村中將
彦之丞

中
村
大
將

天的の勇氣もあるべけれど、先、負傷をたり、戦死をたる
者は、その舉動が、壯烈なるを以つて、吾も、見苦しからぬ
戦死を志たしと、刺激せらる。親戚朋友、又、知らぬ人の手
紙にも、刺激せらる。その手紙に、「怪我せず、歸れ」とは云
はず。勝つて歸れ」とある爲に、非常の勇氣を増すなり。

現に、余の如きも、「婆艦隊來る」との報ありし時、東郷大
將、上村中將などと、共に、訣別の爲に、上陸せしが、もとよ
り、重大なる責任を有するを以つて、個人としては弱く
とも、やれるところまでは、やる積なりしが、いよく、家
を辭する際、いつもは、立派な勳を
なるが、門まで送り來り、較一、大切にせよ。立派な勳をし

慰藉
慰安
慰撫

て歸れ」と云はれしを、身にちみて、深く感じ、勇氣一倍を加へたりき。

日露戰爭中には、國民一般絶えず、軍人を慰藉して、その勇氣を添へたり。知るも知らぬも、屢、手紙を贈り來りしが、必、「生還せよ」とは、云ふ者なかりき。吾々、あり難さに堪へず。戦死者の遺物を見ても、その家内よりの手紙には、「國のために死せよ」とありたり。敵國の、いかがはしき手紙とは、全く、趣を異にせり。かく、國民の考が、立派なりしを、以つて、それに刺激せられて、兵士は、自、勇氣を増さざるを得ざりき。尾張の、ある貧しき人が、手紙をくれしに、「今後の大海戦は、是非、立派なる働をして、驚天動地の

趣(赴)

祈禱

夜叉
惡鬼

勳功を建てて貰ひたし。依つて、熱田の社に日參して、諸君の健康を祈りつゝあり。同社の守札を呈す。願はくは、肌につけられよ。家内一同、西向して、禮拜して居る」とありて、我等は、非常の感にうたれたりき。水兵も、これに感激して、元氣を奮ひ起したる者、多かりき。

げに、いつはらず、飾らず、銜はずして、正直に、心中をうちあげられたるものかな。將軍の如きは、軍人として、仕上げられたる人なれば、刺激なくば、勇氣ゆるむと、いふが如き筈なし。されど、將軍とても、神にあらず、夜叉にあらず。老母に、「立派な働せよ」と勵され、知らぬ貧人の、至誠を以つて、戦勝を神に祈れる者より、守札をおくられては、苟情ある以

妄
濫漫獵

上は、感激して、勇氣のために、更に、加らざるを得ず。まして、將軍の如く、軍人としては、仕上げず、教育も、修養も、少き、一般の兵士にありては、なほ、更の事なり。將軍が、妄りに、戦功を自慢せずして、かく、正直なるところを、言はれたるは、實に、欽すべきことなり。

一朝
一旦

元來、日本人は、勇氣を以つて、まされる國民なり。一朝、事あれば、君國のために、笑つて、身をなげうつならはしなり。されど、出軍するに當りて、最愛の妻が、あまりに、別を惜みて、泣きすぎり、戰場に出でて、後も、泣言をいうて、來たり、死なずに歸りくれよ」と、云うては、猛き武夫も、幾分か、心ひかれて、勇氣にぶるべし。勇氣なきものは、なほ、更の事なり。こ

出軍
出陣

根性
性根

に反して、妻たるものが、事を辨へ居て、私情を抑へ、別に臨みて、も、妄りに、涙をそゝがず。夫の戦に出でて、後も、家の事は、少しも、心配するな。唯、國につくせよ」と、言ひやりては、意氣地なき人も、ために、刺激せられて、幾分か、勇氣を生ずべし。村民一同に、幾旒の旗押立てて、停車場まで送り來り、萬歳と、大呼せられては、身體、何となく、ぞく／＼して、卑劣なる事しては、村民に對しても、相すまずと思ふは、自然なる、純潔なる、人間の常情なり。その萬歳の聲を、人を殺す聲なりとのみ、思ひとるは、腐りたる根性なり。ひがみ過ぎたる根性なり。無事にて、歸りてもらひたきは、人の常情なり。されど、國民の義務あり。男子の意氣あり。義理あり。個人の上

スバルタ
往昔、希臘同
盟國の主なる
一國。西紀前
四百年の頃。

殘酷
殘忍

忘妄怠

に、國家あり。君主あり。そこを辨へて、妄りに、これを口にせざるは、必しも、人情をいつはるものにあらず。上古、スバルタの母たる者が、その子の出征にのぞみて、顔に創負ふとも、背に創負ふな」と云ひたるは、子の死を喜びしにあらず。死よりも、一層、大切なる、男子の本分あるを、思ひたればなり。國の爲めに死せよ」と云ふを、死を喜ぶ、殘酷・非道の心より出でて、人情をいつはると思ふは、私情より外には、何を辨へざるものなり。心に泣いて、顔に笑つて勵すを、勵さるゝものも、ひがまずに、その本心をさと、大事の爲には、私情を忘るべきものと、相互に、合點す。その間に、うそもなければ、理を矯めたることもなく、私意を挾んで、おだて

怯夫
懦夫

たるところもなし。かく種々の刺激をうけてこそ、勇士、いよく、勇に、怯夫も、少しは、勇氣を生ずべけれ。天町芳衛―
桂月小集に據る。

八、獨立戰爭

コロンブス
伊太利人、
リストップア
ーコロンブス
亞米利加發
見
一四九二年。
勝
克捷
凌(陵)

コロンブスの亞米利加を發見せしより、歐羅巴諸國の人民は、新世界の富を占領せむとて、先を争ひて、移住せり。殊に、英國人は、艱難に勝ち、事業を爲すべき氣力に富みたれば、最、困難なる場處をも憚らず、極寒の氣候に堪へ、土人の暴虐を凌ぎ、忽、廣大富饒の殖民地を成せり。
その後、英國は、屢、他國と戦ひ、國費多端になりて、賦課の

覘伺

乃 即則
ポストン
北米チユーセ
フト州の都會。

重きに堪へざりしかば、殖民地の富饒を妬む念、漸萌し、遂に己が負擔を、米國人に負はしめむと、志たりき。
然るに、米國人は、皆相謂ひて曰はく、英人は、唯英國の税を議すべし。吾等が金囊を覘ふべからず。吾等が艱難辛苦は、英人、豈これを知らむや。一たび、不當の賦課に應ぜば、遂に、際限なからむとて、一人も、本國の命を奉ずる者なかりけり。英國政府は、その氣色を見て、思へらく、命令を奉ぜずば、兵力を以つてせむと。乃、軍隊を、米國に派遣せしかば、米人の激昂は、ますます、甚しく、遂に、ポストンに於いて、兵士と人民との間に、一場の争鬪を起ししこそ、亞米利加十三州の、爆裂の、導火とはなりにけれ。

彌 互渡

盡 竭
跣足 素足
汚辱 屈辱
恥辱

かくて、戦争は、數年に彌れり。暴威に従はば、饑寒に死ぬ。暴威に逆はば、砲丸に死ぬ。見苦しき餓死をせむよりは、唯、戦場に死ねや、死ねやとて、米人は、皆、必死を極め、老いたるも、若きも、萬事を抛ちて、戦場に向へり。兵糧、彈藥は盡くれども、米人の氣力は衰へず。刀曲り、槍折るれども、米人の精神は挫けず。衣は敝れ、靴は無く、跣足に、血は流れて、雪を染むれども、米人が清白なる正氣は、つゆばかりも、汚辱を受けざりき。

老女の、二人の子を持てるありき。兄は十五、弟は十三なりけるを、今はとて、軍に出さむとするに、家、固より、貧しかりければ、唯、一挺の庖刀を、兄に持たせ、弟には、錆び朽ちた

稚幼

分捕
捕獲
鹵獲

率
統率
利率
ワシントン
初代大統領
一七二二年生、
一七九九年歿。

る小刀を與へたり。弟は、稚心に、我も、あの様な庖刀を持たばや」と、羨むを見て、母は、涙を流して、あはれ、不便の者どもかな。汝、貧家に成長し、其の庖刀を、上なきものとや思ふらむ。早く、戰場に赴き、敵の大將と見ば、引組んで、捻ぢ倒し、黄金作の陣刀を分捕せよ」と、誠め勵して、出し遣りけりとかや。

誠に、人の一念ほど、恐ろしき者はなく、一致の力ほど、強き者はなし。かくまでに、凝り固れる米國人を率ゐるは、智勇兼備にして、清廉潔白なるワシントンなりければ、歐羅巴に、猛威を振ひし赤隊も、襪襪を纏へる米國人に、勝つこと能はず。日に輝ける利劍も、竹槍石礫に敵すること能は

羈絆
束縛

羅列
陳列

ず。終に、萬國の公認を得て、米國は、英國の羈絆を脱し、獨立の布告を發せり。これ、實に、西曆一千七百八十三年九月三日なりき。

これより、米國は、共和政體を創立し、ワシントンを大統領に戴きて、亞米利加合衆國萬代の基礎を固めたりき。

(國語漢文教程)

九、北米合衆國國旗

北米の新天地に、共和の國を建て、自由の風を吹かせ、愈、その光を放てる、星條の國旗は、そも、何事を語れるか。横に畫かれたる、紅、白の十三條、その上隅に羅列せる、青天四十

壓抑
壓制
抑制

變
換代

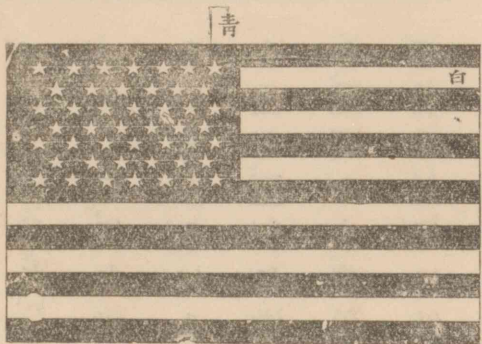
クエカー派
ジョージ、フ
オックスの建
てたる耶蘇教
の一派。
費府
フィラデルフ
イア。

六個の白星、これ、何事を意味するか。この紅白十三條こそ、
建國の由來を説明せるものにして、英國政府の壓制に抗
して起ちし、勇猛純潔なる、當年の十三州を示せるものな
れ。四十六個の白星は、その後、合衆國に加りし、幾多の州數
を彰したるものなり。されば、十三の條は、終始、變る事なけ
れども、星の數は、時によりて、異同あり。かの布哇が、進歩し
て、合衆國の一州とならむ曉には、この星の數、また、一つを
加ふべきなり。あはれ、この、光あり、榮ある國旗を造りし者
は、誰ぞ。ベッシー、ロックス夫人、其の人なり。
夫人、幼名をグリスカムといへり。クエカー派の信徒な
り。父は、建築師にして、かの費府の獨立閣の建築に與りた

獨立閣
原名インデペ
ンデントホー
ル。

積積績績

揮
振震奮



合衆國國旗

るを以つて、名を知らる。當時、費府に、名だかき、室内裝飾匠
ウエプストル氏の工場ありき。時しも、此の工場にて、衣服の
裁縫を受負ひしが、仕立方、甚、困難に
して、襞績を取るに至りては、幾多の
工女を苦ましましめ、誰一人、成し遂げ得
べくも見えざりけり。ウエプストルは、
つとに、クリスカム嬢の、裁縫縫箔、そ
の他の技に、秀でたるよしを聞き居
たりければ、こゝに、嬢に託するに、こ
の難事を以つてせり。嬢は、この依頼に應じて來り、その妙
手を揮ひて、幾多の工女が、手放したる衣服を見事に、縫ひ

備
雇

上げぬ。ウェアストール、いたく喜び、其の父母に申し送りて、嬢を、己が工場に、備ひ入れぬ。幾程もなく、同じ工場に勤むる、ジョン、ロッスといふ人の許に、嫁ぎぬ。

かくて、新夫婦は、たのしき家庭をつくりて、各、その業務をいそしみけるが、折しも、北米の人民は、その母國と、葛藤を生じ、壓制に逆ひて叫ぶ聲、漸、高く、自由の聲、各處にひびき、愛國の士、義勇の民、踵を接して起ちぬ。將軍は、劔を按じて勇み、健兒は、銃を擔ひて奮ひ、慈母は、その子を誡め、貞婦は、その夫を勵し、殺氣天地に漲り、戰雲、遂に、破裂して、曲直を干戈に訴ふるに至りしかば、ロッスも、いかで、躊躇すべき。或夜、デラウェア埠頭の附近に、火藥庫を守れる際、不幸に

躊躇
遂巡

斃
仆倒
好事魔多し

して、敵の銃丸に斃れぬ。好事、魔おほし。憐むべし。ベッシーは、鴛鴦の契、いまだ、全からざるには、はや、寡婦として、世に残され、涙に、袖の乾くまぞなかりける。されど、徒に、悲嘆の涙に暮れて、己むべきにあらねば、みづから、心を勵して、己が業務をいそしみ居たり。

茲
爰
描
畫

さる程に、總督ジョージ、ワシントンは、ベッシーの叔父なる大佐ロッス、及び、國會の委員等と、ロッス夫人を訪はれて、茲に、大任は、夫人の雙肩にかゝりぬ。ワシントンは、一の略雛形を示し、この考案に基きて、然るべき旗を、造り得べきかと、ありければ、夫人は、身に餘る面目を謝し、如何様にも、試みるべき由を答へぬ。さて、よく、圖案を見れば、描かれたる星

贊同
贊成

は、六角なりければ、星は、五角なるこそ、正しき形なるべけれ」と申し進めたり。我等も、知らぬにはあらねど、星は、數多くを要すべければ、五角の星を造らむよりも、六角の方角目正しく、造り得べしと思ひて、かくは描きたり」と、委員等の答を、聞きもあへず、紙片を片手にして、鋏を取るよと、見るより早く、五角正しき星は、驚き見る人々の眼に映じぬ。叔父ロツスは、いふも更なり。ワシントン始めて、委員等も、いたく、感じ、こゝに、六角の星を改めて、五角の星と爲し、その他、夫人が申し出でたる考案にも、贊同の意を表し、然らば、旗の事は、御身に一任すべければ、星の位置、條の排列、全體の結構も、御身の好むとほりに、その雛形を造り給へ

纖弱
羸弱
尪弱

とて、委員等は立去りぬ。夫人は、勇みたち、さまざまに、意匠を凝して、經營慘憺、つひに、見事なる旗を造り出でたれば、これを國會にさし出し、首尾、いかにと、待ち居たり。程なく、これを以つて、合衆國の國旗に採用すべきやう、報告あり。また、數多の國旗を造るべき命さへ下りぬ。

夫人の面目、光榮は、身に餘れり。その責任も、また、甚、重からずとせず。顧みて、纖弱の身を以つて、果して、この大任に堪ふべきかに至れば、健氣なる夫人も、老ぼしが程は、心安からざりけり。多くの國旗を造らむには、少からぬ材料を要すべく、さりとして、これを購ふべき、金とはあらず。夫人は、

天は自助くる者を助くる
スマイルス自
助論開卷の
詞。

徳孤ならず。
論語に、徳不
孤、必有隣。

己(己己)

いたく、胸を痛めたりき。されど、天は、自助くる者を、助く」とか。思ひがけなき多額の金員は、思ひもかけざるに、夫人の手に落ち來りぬ。こは、叔父ROSS大佐が、さきに、他の委員と別るゝや、急ぎ、家に歸り、かの金員を調へて、夫人の許に送り來りしなりけり。且、叔父は、この金員もて、費府に在る旗布をば、悉、買ひ盡むべきことを、告げたり。徳、孤ならず、必、隣あり。夫人は、心を決して、此の大任に當りぬ。
夫人は、己に、十分なる金員あり。十分なる材料あり。前には、輝く希望あり。後には、寄るべき叔父の同情あり。ただ、己が成功を思ふ外、他に、慮るべき事とはなし。心も楽しく、氣も勇みたち、拮据勵精、ひたすら、この大任を全うせむが

原始
最初

ジェファ
ソン
三代大統領、
一七四三年
生、一八〇九
年歿。
バドリック
ヘンリー
一七三六年
生、一七九
九年歿。
フランク
ン
電氣發明者、
一七〇六年
生、一七九
〇年歿。

爲に、盡しぬ。かくて、星條の旗は、自由の風に翻りて、北米の新天地に、共和國の目標と、樹立せられぬ。物變り、星移りて、今日においては、夫人の手に成りし、原始の國旗が、いかに成りゆきしかは、知るに由なく、語るに人なきこそ、返す返すも、口惜しき事のきはみなれ。
あはれ、十三州の獨立は、歴史上の花にして、ワシントン
の劔、ジェファソンの筆、さては、バトリック、ヘンリーの絶叫、フ
ランクリンの奔走など、皆、人の、よく、知れる所なるを、千歳
の下、仰ぎて、當年の活歴史を志のばしむる、この星條の國
旗が、一閨秀の手に成りしものなる事は、知る人の、ありや。
なしや。

一〇、星と花 (王井林吉)

おなじ自然の、おん母の、

御手に育ちし、姉と妹。

みそらの花を、星といひ、

わが世の星を、花といふ。」

彼と此とに、へだたれど、

にほひは同じ、星と花。

ゑみと光を、よひくに、

かはすもやさし、花と星。」

さればあけぼの、雲白く、

み空の花の、あぼむ時、

見よ白露の、一あづく、

わが世の星に、涙あり。」

一一、名將の文事

太田道灌は、足利氏の頃に出で、文武ならびすぐれたる、
名將なりけり。或時、その主上杉定正に従ひて、上總の廳南
に、軍を出す時、敵海邊の山上に、石弓を仕掛けたり。折ふし、
夜の事なりけるが、潮干なば、干潟を押通しなむ。潮湛ひた
らば、通りがたかるべし。いかに」と、人々、僉議しけるに、道灌
「いざ、見て來む」とて、馬を乗り出しけり。程なく、歸り來て、潮

從 隨
石 弓
礮
僉 議
詮 議
評 議

は干たり」とて、軍を押通しけり。これは、

遠くなり、近くなるみの、濱千鳥、

なく音に潮の、満干をぞ知る。

と、よめる古歌あり、それを思ひい出して、千鳥の聲、遠く聞えたれば、潮の干たるを知れりとなり。又、引きて歸る時、利根川を渡さむとするに、これも、夜半にて、暗さは暗し。諸軍、渡しかねて、いづこか淺瀬なるべき」と、のゝしりあふに、道灌、また、古歌に、

そこひなき淵やはさわぐ。山川の、

淺き瀬にこそ、あだ波は立て。

と、よめり。波音の荒き處を渡せ」と、下知して、難なく、軍勢を

そこひなき
古今集に出
づ。
下知
命令

渡しけり。

寛正五年、京師に朝して、時の將軍足利義政に見えし時、後土御門天皇詔し給ひて、「武藏野は、いかに」と、問はせ給ひしに、道灌、やがて、

露おかぬ、方もありけり。夕立の、

そらより廣き、武藏野のはら。

と、答へまつり、「隅田川の都鳥は、いかに」と、仰せたまひしこ、

年ふれど、わがまだ知らぬ、都鳥。

すみだ川原に、宿はあれども、

「さらば、なべての景色は」と、ありしに、
わがいほは、松原つづき、海近く、

富士の高嶺を軒ばにぞ見る。

といづれも、歌にて、即答しまつりしかば、叡感斜ならず、忝くも、

武藏野は、苜萱のみと、思ひしに、

かゝる言葉の花も、咲きけり。

と、御製さへ賜ひて、賞讃せさせ給ひけり。

ただに、武威を八州の野に振ひしのみならず、文藝も、亦かく、九重の雲の上に達して、その面目を施ししも、元は、かの少女が歌により、いたく、節を折りて、學問に心を寄せたるによれりとぞ。

賞讃
感賞
嘆賞

草より出で

古歌、武藏野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ。

一一、江戸のなりたち

江戸は、今し、東京とこそいへ、昔は、月影の、草より出でて、草にこそ入れ」と、歌へるばかり、廣く遙けき、武藏野の末にして、町は、かぎりもなく、廣き野原に續き、東の入海は、廻りて、遠く、陸の間に入りこみしを、長き年月経る間には、野も、かたはしより、田畠に開けしなるべく、海も、川水におし流されたる、沙に埋められて、洲は、陸に續き、或は、島と變りつつ、幾千度、そのさま、かはりつらむも、測られず。

江戸の城は、康正三年に、上杉定正の家老なりし、太田持資入道道灌の築けるなり。道灌の、この城づくりし頃は、城のまぢかくまで、船漕ぎ寄すべかりきとぞ。天正十八年、徳

測
量計謀

康正
後花園天皇の時。
天正十八年
後陽成天皇の時。

濠

川家康公、この地の便よきことを見定めて、移り居られしより、賑しき都とはなれり。されど、この頃の事をあるせる書によれば、城より東は、葭の茂れる、潮入にして、諸士の第に、割り渡すべき地は、十町に足らず。かくては、大名の城下にはなるまじと、いひつる者さへありしよし、見えたれば、その開けざりしさま、おしはかられぬべし。

家康公は、道灌の築きし城を、本丸とし、四方の石垣も、濠も、修めかへられて、大城となし、整へられき。さて、四方の海の波穩に、吹く風も、枝を鳴さぬ御代となりにしより、出で入る人も、移り住む人も、年ごとに、數まさるにつけて、神田山も崩され、下谷沼も埋められ、淺草は、隅田の川口より、程

遺殘

遠き川上となりて、今は、海苔の名に、古の形見を遺せるの



家康開府當時の江戸圖

み、されば、貴人の、きらびやかなる第のあたりは、狐狸の隠れし、叢の跡にして、商人の、うるはしき家の下は、鯉・鮒の潛みたる淵なりしを、さりとも、知る者なきばかり、うち開け

たるは、いと、めでたきことになむ。(佐野常民)

一三、螢

也有
俳人。尾張藩
十横井時般。
百蟲譜
也有著、鵜衣
に出づ。

「螢は、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、ただ、このもののためにやと、までぞ覺ゆる」と、也有が、百蟲譜にかきたるも、げに、ことわりなり。その、亂れ飛びては、この頃の、降りみ降らずみの空に、何の星かと疑はれ、草むらに宿りては、時ならぬに、何の花かと、怪まるゝ奇觀は、まことに、比すべきものもなかるべし。されば、むかしより、いづこの國民も、皆、これを愛せり。

螢といへば、何人も、直に、火といふ聯想を、ひき起すべし。現に、我が國の、「ほたる」といふことは、火垂、又は、火照とい

燭
燭臺
蠟燭

惹
挽引牽

缺
闕

ふ意より、出でたるならむと、いへり。又、支那に、夜光照夜燃燐宵燭、挾火、自照など、さまざまの異名あるをはじめとして、いづれの國の言語にても、螢といふ名は、皆、火に縁あるもののみなり。まことに、この、火といふ聯想こそ、螢の命ともいふべきものにして、もし、これなかりしならば、恐らくは、その、人の心を惹くこと、かくまでにはあらざりしならむ。そは、同じ螢科に屬せる昆蟲類にて、その形、螢によく似たるものの、少からぬにもかゝはらず、その美しき光を缺けるために、動物學者以外の人には、少しも、知られざるにても、知るべし。

さて、この螢をば、春の花、秋の紅葉の如く、一種の景物と

詠唱
詠吟

晉の車胤の
故事

蒙求に、晉車胤、家貧、常不得油、夏月、練囊盛數十螢火、以照書、以夜繼日。

恐
懼怖・畏

燈
提燈
燈火

して、昔より、詩歌文章に詠唱したる例のことに、東洋の國に多きは、今更、いふまでもなきことなれど、更に、これを燈火にかへて用ひたる例も、彼の支那の晉の車胤の故事を外にして、我が國にも、西洋の國々にも、また、少からず。北亞米利加なるメキシコの海岸にては、そのむかし、海賊、横行して、まばく、通行の船舶を却ししかば、そのあたりを渡る舟人は、皆、恐をなして、海賊の眼にかゝらざらむことを、つとめたり。されば、夜中の航行には、船中に、燒火を用ふることを禁じ、その代用として、この地に産する、大なる螢を集め入れたる籠を、乗客に渡し置けりとぞ。かゝる例は、我が國の昔にもありて、これを、まのびの提燈に用ひ

ビートル、
マーター

伊太利人、一四五五年生、コロンブス同時。

拇指
壁

換
替
載(戴)

たること、古き物語などに、見えたり。又、ビートル、マーターといふ人の、亞米利加發見後、三十年ばかりを経たる、彼の地の事を記せる、「新世界」といふ書には、その地の土人の、暗夜に、深林を行くに、大なる螢をば、わが足の拇指に縛りつけて、その進路を照すに用ひ、やがて、螢の弱りきて、その光、薄くなる時は、更に、新しき螢と取換へて、その光によりて、道をたどりゆくといふことを載せたり。

まかして、こは、ひとり、遠き昔の上のみにはあらで、現に、我が近江の守山、今宿等の地にては、今日も、なほ、螢の光によりて、夜道をたどる習慣ありとのことなり。その地方は、總じて、螢多く、小川に添へる田圃道には、その岸の草むら

に、數かぎりなき、螢の集れるよしなるが、杖をもて、つと、草むらを打つ時は、螢は、そこに、強き光を放つをもて、いかなる闇の夜にても、明らかに、その前途を見分くることを得と、いふ。されば、この邊の人は、提燈を携ふるかはりに、一本の杖を携ふるを、常とせりとか。

又、キューバ島の邊にては、螢を、絲につなぎて、婦人の胸飾、又は、髮飾となせり。この邊の螢は、その大き、一寸餘もありて、その光強ければ、その飾は、恰、夜光の珠もて飾れるが如くにして、その美しさ、いふべくもあらずとぞ。又、ベーコンといふ學者の書ける、古き博物書には、小兒等の、螢をば、透明なる瓶中に入れて、これを川中に沈め、その光に寄りく

キューバ島
西印度諸島の

珠

玉壁

ベーコン

英國人、一五
六一年生、一
六二六年歿。

る魚類を、捕へたる話を載せたり。

又、ある畫家は、螢を畫かむ爲に、その螢の光を借りたりといひ、近き頃、佛國にては、この光によりて、寫眞をうつしたる學者ありと、いへり。我が國にても、ある地方にては、養蠶の期節に、螢を籠に入れて、蠶室に備へ置きて、夜間、鼠の襲ひ來るを防ぐと、いふ。

かくの如く、螢の光を、燈火に代用する事は、各國ともに、昔より、行はれたることにして、おもふに、未、燈火の發明なかりし、草昧の時代においては、その需用、頗廣かりしものならむ。されば、余は、彼の車胤の故事は、虚名を好む支那人の、作話ならむといふ、ある學者の説には、容易に、従ふこと

草昧
蒙昧
暗昧

能はざるなり。(渡瀬庄三郎―螢の話による)

一四、長良川の鵜飼

美濃國長良川は、岐阜の稻葉山の麓を流るゝ川なり。昔は、稻葉川ともいへり。水源は、同國郡上郡じじょうより出でて、郡上川といひ、武儀郡むぎにて、藍見川といひ、それより下を、長良川と稱す。末にては、墨俣川すまともいへり。この川、鮎あゆ多く産し、その香味、殊に、優れたるを以つて、名高し。

此の長良川にて、漁人、鵜をつかひて、鮎をとる。これを鵜飼といひて、世に、珍らかなるわざとす。鵜飼は、鮎の成長するを待ちて、初夏の頃に始め、秋季、鮎の衰ふるに至るまで、

香味
美味
甘味
風味

浮
泛

篙
棹
竿

吞
飲

夜間、月なき闇夜を待ちて、船を浮ぶ。その宵闇の頃は、日の暮の程に、上つ瀬に上り居て、飼ひ下すなり。

鵜飼の數、長良人は、七艘、小瀬人は、五艘の船をならべ、船一つに、鵜匠一人、中鵜使一人、篙工二人乗り、船の舳先に、篝火をともし、鵜を十六羽、各、其の頭を、繩もてつなぎ、繩のもとを、一つによせて、鵜匠の手に持ち、水に放ち入る。此の繩を、手繩といふ。この時、鵜匠、互に、聲を揚げて、勢を添ふれば、鵜は、鮎を逐ひて、おのがむきく、水底に潜り、ときまかうさま、行きちがふまゝに、蜘蛛の巢のごとく、亂るゝ手繩を、いと、たやすく、繰りさばきつゝ、片手には、鵜の吞みたる鮎を吐かせ、又、水に追ひ入れ、篙に松を焚きそへなどして、と

追 逐
北 逃

ばかりの隙間もなく、立働くなり。此の船どもを、浮け竝べ
て、漕ぎ下すを見れば、篝火の影は、流をやき、雲に映りて、其
の景色、物に譬へむやうなし。
又、時によりては、卷狩といふ事をなす。こは、數多の船を、
一つにならべ、川のよどみを取りまはし、或は、上り、或は、下
り、篝の影、入り亂れ、火花をちらし、我劣らじと、船ばた打ち
たゞけば、晝より明き水底に、鮎は、おそれて、度をうしなひ、
前後左右に、逃げまどふを、百餘の鵜は、たがひに、先をかけ
争ひ、この平瀬、かしこの片淵に、追ひつめ、せめつめ、呑み
ては、浮び、吐きては、沈み、頻りに、捕りて、やまざるは、譬へば、
戰場に、北ぐるを追ひ、走るを討ちて、縦横散亂するに似た

移 徙 遷

赤壁
支那湖北省武
府嘉魚縣。

文明
後土御門天皇
の時。

り。觀る人、興に入りて、時の移るを覺えず。世に、すなとり業
多しといへども、其の奇絶なる、鵜飼に如くはなく、鵜飼は、
長良川に如くはなし。それを觀るには、岐阜の稻葉山の麓あ
たりを、勝れたりとす。

此の山の、長良川に臨める風景は、支那の赤壁に似て、い
と、面白きに、夕さりつ方より、暑さを避けがてら、小船を浮
べ、山陰に棹さして、さゝえ取り出し、一盞を傾くる程に、川
上なる、船伏山のかなたより、篝火の影、波にうつりて、花や
かに、見えそめたるは、霞のひまより、櫻のほひ出でたる
さまにも、まさりつべし。

文明年中、一條禪閣兼良公、當國に下り、厚見郡江口村に

慶長 後陽成天皇の
時。
東照公 徳川家康。
元和 後水尾天皇の
時。

て、鵜飼を見られしことあり。又、慶長十六年には、東照公、元和元年には、將軍秀忠公も、岐阜に來りて、鵜飼を見物あり。其の後、尾張の藩主權大納言義直卿を始め、代々の主も、たびたび、遊覽し、其の他、文人、詞客の、これを觀むがために、來り遊ぶもの、世々に、絶えざりけり。三浦千春 萩園遺稿による。

一五、夏の樂

茂 繁蕃

夏も、やうやう、深くなりぬれば、木として、茂らざるはなく、草として、榮えざるはなく、日々に、物を引き延ぶるやうに見えて、一向に、緑の色深き、夏木立こそ、花にも、をさく、劣るまじけれ。春の花は、所々に咲きて、稀なり。夏は、山も里

前栽 植込

音もせて 後拾遺集源重
之の歌。音も
せて思ひにも
「ゆる螢こそ啼
く蟲よりも哀
なりけり。

眼を放にし 白氏文集に、
放眼見青山、
山任頭生白髮。

も、ありとしある草木毎に、うちはへて、みな、緑の色なれば、春に異なる眺なり。種々に植ゑ集めて、なづさひし前栽の草木ども、雨を帯びて、おのく、その梢を顯し、所え顔に、心に任せて、生ひ茂れるも、嬉しと見ゆ。昔おぼゆる花橘の薫れる夜は、追風も、いと、なつかし。早苗とる頃、田家は、雨を待ち得て、忙しく、賑し。この頃、遣水の邊に、飛ぶ螢の、音もせて、すだくを見れば、啼く蟲より、いと、憐むべし。夏山の氣色、青み渡りたる高き峰、大空に連りて、雲の外に聳えたるを、飽くまで見るこそ、殊に、すぐれて、心を快くする眺なれ。白樂天が、眼を放にして、青山を見ると、いへるが如し。
水無月の頃になりぬれば、端居の風親しく、わらふだち

休憩

聽聞

きて居るも、快し。池の心深く、蓮葉の濁にまみらずして、花な
 くて、夕風に匂ひわたるだにも、異草に勝れたり。ことに、花
 のゑみの昏開けたるは、所せきまで、かをり満ちて、世に、似
 るものなく、清らなり。涼を追ひて、木蔭に休み、木々の下風
 のなつかしきに、清き泉を掬ひ、夏を忘るゝ心地するも、潔
 し。光明き夜はの月を、清き水に宿して見るは、更なり。遣水
 の音など聽くも、いみじう、心行くばかりなり。日ごろ經て、
 暑さ堪へがたきに、夕立の、一ちきり、わたりて、名残涼しき
 も、いと、こゝろよし。(貞原益軒—樂訓)

一六、泰西女學生の休日

險嶮

ウヰンダミ
 ヤ
 イングランド
 の北部
 塾熟

泰西婦人、殊に、英米の女子は、高山峻嶺も、物の數とせず、
 輕装して、杖によりて、巖を蹈み、蔓を攀ぢ、險を冒し、奇を探
 る者、甚、おほかり。且、妙齡の女子は、おのが修め得し學科に
 つきて、植物を求むる者あり、動物を尋ぬる者あり、地理に、
 歴史に、理化・博物に、勉めて、學問を、實務に施し、試みむとす
 るなり。

余が、ウヰンダミヤの女學校に止宿せしは、恰、夏期休業に
 かゝらむとする時なりき。休業時の、最、長き學校の女學生
 等は、早く、塾舎を離れ來て、その秀麗なる山邊の、勝景を探
 るも、少からず。或は、鉛筆と、畫洋紙とを手にして、汀の巖頭
 に、腰うちかけ、餘念もなく、山雲・流水の姿を模寫せるもの

重疊
重複

攝養
養生
攝生
飲羨
羨慕
羨望

あり。太きブリキの筒を肩にして、植物を摘み、紗の叉手を持ちて、胡蝶・小蟲を捕ふるもあり。漣漪に棹さして、層々、重疊せる山脈を遠望するは、地理の研究なるべく、草露を踏みて、累々たる古墳を尋ぬるは、史料の探訪なるべく、或は、詩文の材を求むるなるべし。かく、思ひくゝの嗜好に任せ、新鮮の空氣を呼吸し、身體の攝養を計ると共に、學藝を、實地に學び、快樂を、高雅に求むる風俗、まことに、飲羨に堪へざりけり。

一日、余が宿泊せる女塾の休業日に當れり。當校の塾生は、百二・三十人にして、いづれも、皆、十六・七歳、乃至、二十四・五歳の人なり。本日は、珍しき客人もあれば、水にまれ、山にま

れ、心を遣りて、遊ばむ」といふ。余は、「湖上の舟は、既に、試みつ。

近き山には、毎日、散歩し行きたれば、同じくは、遠きところに行かまほし」といふ。さらばとて、當家にある車の限をととのへ、荷物馬車をさへ裝束して、出立たむとす。されど、すべての生徒を載すべきにあらねば、總人數を三分して、抽籤をなし、一群は、舟にて、湖水を横ぎり、一群は、徒歩にて、今

抽籤
圖引

一群は、馬車にてと、定む。斯くて、我等は、輕車を驅りて行く。

「第一に、さす方に到著すべし」と語り合ひつゝ、七哩許の道を、湖に添ひ、山を廻りて馳す。道すがらの風景、最佳なり。行き行きて、ある森の邊に臨める樓に達すれば、立ち迎ふる人々あり。誰ぞと、見れば、舟行の一群なりけり。舟は、湖二つ

登
上昇

歡勸觀

を渡りて、其の間、所々、徒歩すべき場所もあれば、我等よりは、一時間以上、後るべしと思ひしに、など、此方は、うち驚けば、いかで、君たちに、おくれを取らむや」と、彼方は、勝ち誇りたり。うち連れて、樓上に登り、とばかり、憩ふ程、徒歩の群も、はや、到りつきぬ。さて、晝飯を喫し、或は、湖水に浮び、或は、山草を分けて、終日、歡を盡して、歸りたり。こを思ふに、我が國にては、男の子どちらならでは、かくも愉快に、かくも活潑なる遊は、出來まじきなり。

すべて、泰西婦人は、舞蹈・玉突・テニス・コロッケー等の遊は、さらなり。殊に、英國にては、女子の操觚の術も、いと、盛なり。日和よき日には、各公園の池沼の中、妙齡の佳人、三々五々、

外來
遠來

水夫
舟子
船頭

介在
媒介

隊を爲し、艇を連れて、或は、古歌を誦し、或は、唱歌を謠ひつ、心のゆくまゝに、漕ぎ廻るもあり。他と競漕するもあり。内地の人、外來の客、物いひ交し、談りあひて、日の西に傾くを惜むもあり。余も、親しき友に誘はれて、此の端艇中に在りし事、屢なり。戲に、楫を操りて、波を搔かむとしては、舟を揺り、舷を傾くれば、人々、笑ひ興じて、この惡しき水夫の爲に、余等は、魚腹に葬られなむと志たりなど、いひのゝしるも、をかしかりき。下田歌子—泰西婦女風俗抄録

一七、和蘭

和蘭は、白耳義と、獨逸との間に介在して、佛蘭西に近く、

疏通
開通

乘馬
騎馬

防禦
拒

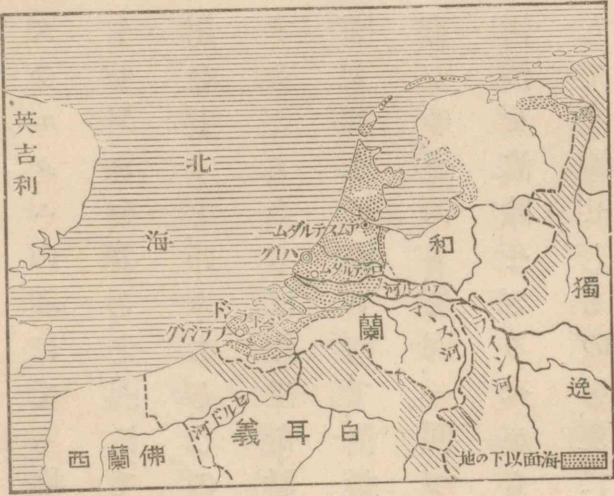
英吉利に對する小國なり。西歐の大河、この國を経て、海に朝するを以つて、運河、縱横に疏通し、最、通商に宜し。然れども、其の地勢甚、奇にして、海上より望むに、その國を見ず。陸地は、却りて、水準の下にありて、低きこと十六英尺に及ぶものあり。河中より、陸上乘馬の人を見るに、低く、眼下にあるが如き、甚、奇觀なり。此の地、もと、獨逸の山地より、流下し來れる土沙と、大洋の風濤の齎したる、土沙とに依りて成り、海岸には、三十英尺より、二百英尺の、自然堤防を築成して、海水を防げる處あり。

此等、海邊の沙岸は、耕作に利ならずといへども、少しく、内地に入れば、松林あり、牧場ありて、畑には、野菜、蕎麥の類

植
栽種

爲
成

を植ゑ、一望、恰彩色を施したる畫のごとし。その輕沙の地には、毎年、葦を植ゑて、これを固むれども、南部に於けるロ



ッタルダム・フライングの邊に至れば、此の沙壁は、ライン・マース・ワール・セルド等の諸河に破られて、河口を爲せり。これ、此の諸河は、獨佛の山上より流下し來るを以つて、突進の勢、おのづから、その通路を開き、自然に、良港を築けるもの、また、少からず。

ギルデン
和蘭貨名、我
が八十錢餘。
決潰
破潰

滄桑の變
神仙傳に、麻
姑謂三王平
曰、自接待
以來、見東海
三變爲桑田
云々。

慣
馴狎

がために、土工を要することも、少からざる所以なり。アム
ステルダムのみにて、堤防を維持するが爲に、一日、數千
ギルデンを要し、全國にては、一箇年、六百萬ギルデンの費
用を要すと、いふ。もし、この土工を怠りて、一朝、堤防の決潰
することあらば、忽ち、生命財産を、流失、蕩盡するのみならず、
國土、海水に浸されて、滄桑の變を見るに至るなり。且、また、
市中の運河も、毎週、一回づつ、其の水を、新陳疏通し、以つて、
汚泥を滌除せざるべからず。これ、市中の塵埃、運河に流下
して、沈澱せしものを、更に、海中に放散する法にして、これ
によりて、衛生上、害少きことを得べし。然れども、土地低く、
濕氣多きを以つて、住み慣れざる者は、爲に、健康を害する

こと、甚、大なり。

泥炭
木炭
石炭

纒
僅

表彰
顯彰
旌表

學者の説によれば、和蘭は、古昔、蒙昧の時代に於いて、茅
茨の茫々たる、沼澤の間に、沙丘の、點々、散在せし地にして、
魚介、水鳥の群集せし處なり。現に、此の動植物は、長日月の
間に、炭化して、泥炭となり、以つて、蘭人の温室、煮沸の資に
供し、數百年間を繼續せり。その當時にありては、海潮、怒濤
を起し、山上の積雪は、寒風に逢うて溶下し、西風、長く、吹き
荒む時は、全土、波浪の下に葬られ、人、皆、丘上に逃れて、纒に、
生命を保ちたりと、いふ。されば、蘭人、自、その國に命じて、ネ
ーデルランド、即ち、低地の國といひ、各市、有する所の紋章の
如きは、皆、治水の功を表彰せるものなり。たとへば、ロッテル

銀河
銀漢
星漢

卓絶
卓越
往日
昔日
曩日

ダム市は、緑面、銀線を劃したるものを公章として、銀河、美田を養ふ意を表し、ジールランド市は、激浪を潜り出でたる獅子を以つて、公章となし、われ、争うて、遂に脱すの句を以つて、市の公銘となす。また、蘭人の諺にも、天、海を造り、我、陸を成すの語あり。即、古昔は、一の泥窟に過ぎざりしに、不屈の氣力と、勉強とにより、互寒、卑濕の地を變じて、良土と化し、航海、通商、殖民、冒險等の事業を以つて、世界に、最、卓絶せる人民となれる、往日の蘭人こそ、大に、歎賞すべきものなれ。鎌田榮吉—歐米漫遊雜記

一八、 休暇日記

今年もなかばは

慈鎮の今様に、秋の初になりぬれば今年も半は過にけりわがよふけゆく月影の傾く見るこそ悲しけれ。

洒
注瀉灌

隣隣(隣)

七月一日、今年もなかばは過ぎにけり」と、となりの女兒うたふ。

三日、半夏生、却りて、雨なり。籬の楓の枯れしあとに、女竹、五竿植う。

今植ゑた、竹からも来る、嵐かな。

とは、古人の句。雨洒ぎて、婆娑々々、木には見られぬ趣、深し。八日、三日月清し。今夕、はじめて、近きあたりの大榎に、爛の聲を聞く。

十三日、隣家の翁、杉籬ごしに、泰山木の花咲きたれば、見に来よ」と、いふ。行きて見る。葉は、ゆづり葉の、それに似、花は、白木蓮を、三つ四つも、合はせたる程にて、芳香、たとへむ方

富麗
艶麗

逗子

相模國三浦郡

盡日
終日

ラッファエル
伊太利人、一四八三年生、一五二〇年死。

班(班)
僂強

究竟

なし。富麗にして、若かも、品高き花なり。

十六日、去年、近所の林より掘り來りし山百合はじめて、開く。逗子あたりは、六月の中旬を盛とするに、一月も後れたる、一は、今年の氣候の故なるべし。盡日、細雨、煙の如く、原宿の夏、いと、寂し。友人某より寄贈せられし、畫聖ラッファエルを讀む。眞面目の著作、ラッファエル及び、その時代の一斑を窺ふに、僂強の手引草なり。

十七日、嫁菜の花、一輪、咲く。こは、去秋、京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる礮より、掘りて來しなり。立ちて見る程に、

水の音も、心もともに、すみゆきて、

月あづかなる、賀茂の夜半かな。

澁谷
東京府下野多摩郡

釣(釣)

搖動

螿刺

と詠みし、その折の清興、水の如く、湧きかへり來ぬ。午後、澁谷の川に、鮒釣に行く。水まさりて、青蘆を没し、川柳の、偃して、小さアーチを作れるを、心得がほの水馬、ついく、潜り行けば、犬蓼の花搖きて、小さ蛙の、さんぶと、水に飛びこむも、興あり。時々、雨、さあと、若ぶきて、風景、みるく、淡墨の畫になりゆく。傘、蓑、笠、そここ、見えたれど、獲物ありとも思はれず。吾も、一尾を得ず、蝸に螿されて歸る。

十八日、菊に肥料をやる。花を愛しそめて、いつしか、肥料も、いと、はしからずなりぬ。肥料を愛づるに、あらず。花を愛すればなり。清濁併せ呑む」といふこと、耳の痛きほど、聞き

窄
狹隘

知り居れど、わが量狭ければ異を嫌ひ、非を惡みて、みづから、世を窄うす。恥しき事なり。

二十日、朝の程、日影さしたれば、貝細工の花、いと美しく、開きしに、やがて、曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣、みるが内に、つばみぬ。またの名を、萬年草といひて、盛の時に、摘み、藥をだに去れば、萬年も、色を保つと、いふ花なれば、すこしの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな。誰か、爾に、かく、自、愛惜することを教へし。

廿五日、晴、夙起、小園を歩すれば、蚯蚓の聲清く、杉籬の蛛網、露を帯びて、白絹の光あり。撫子花、ひあふぎ、百日草、千鳥草、桔梗、ひまはり、金蓮花など、露に濡れそぼあて、夢、いまだ、

爾
汝

醒
覺

醒めじと、見ゆ。亞米利加白蘇、またの名、水蝶花を、隅の方に、捨植になし置きしに、何時の間にか、いと、大くなりて、盛に、花をつけたり。先年の夏、母上の、此の花を見て、西洋の花は、皆、丈夫なり。他に頓著なく、己が咲くべき花を、咲かせて、逞しきを見給へ」と、いはれし一語、耳に響きしより、此の花を見るごとに、其の語を思ひいでざるはなし。夕方、樺色の雲、西隣桔槔の上に浮びて、蝸の聲涼し。(徳富健次郎)

一九、胡枝花

秋風は、すずしくなりぬ。馬なべて、

いざ野にゆかむ、萩の花見に、

秋風は、
讀人不知、萬
葉集に出づ。

郊墟
郊野

うつろはむ
伊勢の歌、拾
遺集に出づ。

賞玩
愛玩
欣賞

山萩やまばらながらの花ざかり。

この花秋の七草とて、尾花葛撫子女郎花藤袴桔梗と、なら
び賞せらるゝものなり。三伏の盛夏、已に過ぎて、新涼、郊墟
に入る頃、早起して、庭前の萩の花を見れば、紅、白、點々とし
て、開き、白露、團々として、その緑なる圓形の小葉を埋むる
さま、げに、やさしき眺なり。

うつろはむ、ことだにをしき、秋萩に、

折れぬばかりも、おける露かな。

萩は、もと、山野に自生するものなれども、亦、庭園にも、移
し栽ゑて、賞玩す。今を去る事、一千六十餘年前、已に、萩の花
あること、史に見えたれば、わが國にて、萩は、久しき以前よ

異名
別名

雨龍原
石狩國雨龍
郡。

わがおりし
千種有功の
歌。

り、賞玩せしことを知るべし。古歌の、初見草、月見草、庭見草、
玉水草、古枝草、秋地草、鹿鳴草などは、皆、この異名なりとぞ。
萩は、荳科植物にして、宿根なり。一種、木萩とて、その幹、小灌
木の如き大きに、生長するあり。宮城野の萩、最、著る。北海道
には、野生の萩、甚、多し。嘗、その、未、今日の如く、開拓せられざ
りし頃、騎して、雨龍原頭を過ぎしに、數里の平野、一望、萩の
花の咲きつづきたる壯觀に驚きしもの、獨、余のみならず
るべし。

わがおりし、錦ならずや。二葉より、

おほしたてつる、秋萩のはな。

萩の花の、虚榮を避けて、まづかに、己が品性を全うする

慕(暴喜)

胸何

如き風情は、けだかき婦人の、いさぎよき節操も思はれて、
慕はしく、谷川の水のさゝやくほとりに、露を含み、こもれ
る愁を、胸につゝみて、笑めるが如き姿のゆかしさは、ひと
しほ、他人のあはれをぞ惹くなる。(はな)

二〇、花すゝき (三條實美)

○

かりそめと思ひし宿の花すゝき、

今年もわれを、招きとめたり。

○

秋來ぬと、おちたる桐の、一葉にも、

まづこぼるゝは、涙なりけり。

○

かくばかり、うきを重ねし、袖ぞとも、

あらでや秋の、露はおくらむ。

秋
煙

二一、東北行幸の記

湛(湛)

今のみかど、天の下ゑろしめししより、このかた、明らか
に治るてふ御代の名も、九年になりにけり。隅田川の水、遠
く流れて、八島の外に、御うつくしみの波を湛へ、武藏野の
草、廣く茂りて、四方の國に、御めぐみの露を結び。かゝり
し程に國の風をも、民の業をも、みそなはさむとて、ことし、

さいつ年
五年五月、九
州巡幸。

陸奥に、おほみゆきを給はむよし、仰せいだされけり。さい
つ年、筑紫の方にいでまししは、海路よりなりければ、物の
はえも、すくなかりしを、こたびは、陸路の御定なれば、縣々
のつかさどもの、待ち迎へ奉るらむいそぎも、まだきに、思
ひやられたり。

御門出は、六月の二日なり。御供につかうまつる人々は、
岩倉右大臣具視・木戸内閣顧問孝允・徳大寺宮内卿實則・東
久世侍従長通禧をはじめ、己等がたぐひのものに至るま
でをかけて、數ふるに、その數、いと、すくなし。さるは、國の費
を厭はせ給ふあまりに、事そがせ給へるなるべし。麴町を
東へ、半藏門より、竹橋・一橋を經、神田・下谷を過ぎさせ給ひ

て、千住の驛に著かせ給へり。こゝまでは、後の宮・三條のお
ほき大臣など、その外の卿も、みな、送り出でさせ給へり。三
條實美、

松島
陸前國宮城
郡。

松島の、まつかひありて、みちのくの、

民も仰がむ、みゆきならまし。

と、よみて奉られたりとかや。今日しも、夏の空とも見えず。
いと、のどかに、天つ日も、光を添へて、導かせ給ふにやと、思
ふばかり、御輦を照し給へれば、道もさりあへず、立ちつど
へる、賤の男、賤の女も、皆、かたへに伏して、みかどと、後の宮
と、別れさせ給ふさまを、拜み奉る。ふるくより、よからぬ習
慣ありて、夫婦の間、うとくしくするを、禮の如く、皆人、思

習慣
慣例
風習

ひなし居たりけるに、后の宮の、かく、都離るゝ所まで、送り
 出でさせ給ひて、御袂もわかち難きまで、懇に、御別のさま
 つくし給へるを、遙に、見奉れる男女、皆、面を見合せて、げに、
 高きもひきゝも、かくてこそ、誠のなさけは、その中にこも
 りたりけれと、感じ思はぬ者はなかりけり。あはれ、民の父
 母とおはしまして、世をみちびきおもむかしめ給ふこと
 は、言の葉の上のみにはあらで、かゝる御かたちのさまに
 も、あるきわざなれば、今日は、おのづから、天と地との間に、
 和氣をふくみたる心ちす。午後一時ばかりに、草加（さか）につき
 ぬ。こよひ、陸奥名所歌集を、行在所にたてまつる。ふけて後、
 月清し。（近藤芳樹—十符菅薦）

草加
武蔵北足立郡。
 行在所
 行宮

二二、 禁庭の野分

朝露の、ひるまは、さしもなかりし空の、暮すぐる頃より、
 かきくらし、夕月の光も見えず。とかくするほどに、雨、いた
 く、降りいでて、ほとり近く、語りあふ人の聲さへ、聞きわか
 ぬばかりになりぬ。閨に入りにし頃までは、なほ、雨の音の
 み聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへなりはためきて、手
 枕の、夢、うつゝとも、思ひ定めぬるひまなく、稻妻のきらめ
 きわたる、いと、すさまじ。曉がたには、雨は、をやみて、風は、は
 げしう、吹き出でつゝ、宮の内も、ゆるぐばかりなるに、いと
 ど、目もあはず。

行幸
行啓

上には、かしこくも、民の爲とて、遠きさかひに、行幸まし
つる程なれば、いかなる行宮にましまして、この風の音に、
御心を悩ませ給ふらむ。

皇太后の宮には、いかにおはしますにか。宮たちもおど
ろきやゑ給ふらむ。思ひつづくるほどに、夜も明けたれど、
風あづまらで、いづこも、おろし籠めたる、いと、ものむづか
し。軒近き、栗の枝の、實を結びたるまゝに、吹き折らるゝ音、
いと、はげしう、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆、折
れふしぬ。今をさかりと見えし眞萩も、名残なう、ちりみだ
れたる、いと、さびしう見ゆ。宮の内さへ、かく荒れぬるを、ま
して、まばらに瓦おきたる、賤が家居などは、たふれたるも

多からむなど、思ひやるも、すすろに、悲し。おしなべて、みの
りよしと聞きつる、千町田の稲も、吹きそこなはれつらむ
やなど、思ひつゝ、

國のため、科戸しなとの神も、こゝろして、

稲葉のうへは、よきてふかなむ。

なほ、心ぐるしう思ふほどに、いつとなく、風あづまりて、
雲間の日影、まばゆく、さし出でたる空の氣色に、おのづか
ら、人の心もおちゐて、はげしと聞きし嵐の音も、夜半の夢
となりぬるなるべし。

こは、聖上、東北御巡幸ありしに、一夜、風雨、いと、烈し
かりしかば、皇后陛下の、作らせ給ひける御文なり。

東北御巡幸
前條を参照せ
よよ
陛よ(階)

御文章のうるはしきは、更なり。心志づかに讀みたてまつれば、そのあつき大御心のほども、知られまつりて、かしこしとも、かしこし。

「上には、かしこくも、民の爲とて」の一段は、御貞操の大御心、皇太后の宮には、いかにおはしますにか」の一句は、御孝行の大御心、また、宮たちも、おどろきやゑ給ふらむの一句は、御慈愛の大御心と、知られ奉りたり。尙又、まして、まばらに互おきたる、賤が家居などは「の一段は、風につけ、雨につけて、賤が伏屋を、思召しやらせ給ふ大御心にて、ありがたしといふも、言葉足らず。嬉しといふも、意残り。あはれ、世の人々、朝夕、拜讀し

慈愛
仁慈
仁愛

朝夕
旦暮

て、大御心のあるところを、知りまつれかし。（落合直文）

二二三、 坤徳

かけまくもかしこき、我が皇后陛下の、聰明仁慈にわたらせ給ふ御事は、天皇陛下乾剛の御徳のきはまりなきと共に、國民のひとしく、仰ぎ奉れるところなれば、今更、こゝに、事々しく、記し奉らむこと、なかく、に、恐多き心地す。されども、この、御うるはしき御影を拜し奉るに當り、聊、坤柔の御徳の一斑をかゝげて、世の、なべての女性と、もろ共に、御美徳の程を、たゞへ奉らむとす。

一斑
一端

皇后陛下には、夙に、教育の事業に、御心を注がせ給ひ、華

華胄
華族

族女學校を設けて、華胄の女子の徳性涵養を計り給ひ、また、屢、同校に、行啓遊ばされ、親しく、教授のありさまをみそなはし給ふ。女子高等師範學校に行啓遊ばされしことも、また、再三に止らず。或は、教育費として、御下賜金の御沙汰あり、或は、學業獎勵の、ありがたき懿旨を下させ賜へるなど、ひたすら、女子教育の隆盛を、期待し給ふ御思召、まことに、かしこききはみになむありける。女學校の式日に、愛らしき生徒が、一齊に、金剛石も磨かずばの御歌を、唱へ出づるを聞くもの、誰かは、さながら、陛下に咫尺して、玉音を拜聽し奉るが如き、心地せざるものあらむ。

陛下には、又、宮人の方々とともに、蠶を養はせ給ひて、こ

金剛石もの
御歌
卷三に出づ。

藉籍
國母
國のおや

の國益多き産業を、勧めさせられ、或は、御親、赤十字の事業を督し給ひ、尊き御身をも厭はせられず、親しく、病院に臨ませられて、病苦に悩めるものを慰藉せさせ給ふなど、實に、古今東西に、たぐひ稀なる、國母の君にわたらせ給ふ。

加之、露國との戦ありける時は、出征將士の上を、思しやり給ふこと深く、繙帶の御製作に、傷病兵の御慰問の爲に、日夜、御心身を勞せさせ給ふ御事、かしこしとも、かしこきに、我が將士は、もとより、言ふに及ばず、敵國のものまでも、大御惠の露にうるほひて、その捕虜となれる者に、義手、義足の御下賜さへありきなど、承るに至りては、誰かは、至仁至慈、海の如く、山の如き御徳に、感激し奉らざらむ。誰かは

この有りがたき國母陛下を慕ひ奉らざらむ。

又陛下には文學の御たしなみ深くわたらせ給ひ折にふれさせられての御歌などまことにめでたくうるはしくして斯道の博士たちも常に驚嘆し奉る所なりと承ることにかしこしと見奉るは陛下にはよろづ御心を用ひさせ給ふこと深く内外の臣僚に對せさせ給ひての御もてなし常に御うるはしくわたらせられ御内助の御績にいたりてはまた奉るべき感嘆の言葉もなき程なりとの御事になむある。

實に我が皇后陛下にはたぐひ稀なる御美德を備へさせ給へり。今こゝに記し奉れるはもとより其のかたはし

内外
中外

幡梭皇后

雄略天皇の皇后、草香幡梭皇女。

藤皇后

仁明天皇の皇后、藤原順子、冬嗣の御女。

檀林皇后

嵯峨天皇の皇后、橘嘉智子、清友の御女。

千皇后

淳和天皇の皇后、嵯峨天皇皇女正子。

儀範

模範
儀刑

御民われ

海犬養宿禰、鷹の歌、萬葉集に出づ。

に過ぎざるに幡梭皇后の蠶を養ひ給へる承和の藤皇后の母儀の範と仰がれ給へるさては檀林皇后の學館院天皇の王皇后の濟治院の事など歴史に見えたる代々の椒房のよき事の多く聯想せらるゝなり。

あゝ陛下には常に婦女子の爲に教育を奨め儀範を垂れさせ給ふ。大日本帝國の婦人たるものいかで大御心の程を體し奉り身を修め家を齊へいやましにこの國を榮えしめむとの覺悟なくして可ならむや。

古の人は御民われ生けるゑるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へばと歌へり明治の御代の臣民は叡聖文武なる天皇陛下とこの至仁至慈なる皇后陛下とを戴け

り。見ぬ世の人の喜は、ものかはと思はるゝなり。三上參次

二四、衛ノ靈公夫人ノ明察

坐(座)
 衛ノ靈公、夫人ト、夜坐セシニ、車聲ノ、隣々トシテ、闕ニ至
 リテ止ミ、闕ヲ過ギテ、マタ、聲アルヲ聞キ、公、夫人ニ問ウテ
 曰ハク、此ハ誰トイフコトヲ知レルカト。夫人曰ハク、蘧伯
 玉ナラント。公曰ハク、何ヲ以ツテカ之ヲ知ル。夫人曰ハク、
 「ワラハ聞キヌ。禮ニ、『公門ニ下リ、路馬ニ式ス』ト。敬ヲ廣ムル
 所以ナリ。夫、忠臣ト孝子トハ、昭々ノ爲ニ、節ヲ變ゼズ、冥々
 ノ爲ニ、行ヲ惰ラズ。蘧伯玉ハ、衛ノ賢大夫ナリ。仁ニシテ智
 アリ。敬ミテ、以ツテ、上ニ事ヘマツレリ。コレ、其ノ人、必、闇昧
 事
 仕・使
 公門ニ下リ
 禮記曲禮に、
 士大夫下ニ公
 門ニ式ニ路馬

視
見・觀看

ヲ以ツテ禮ヲ廢セジ。是ヲ以ツテ之ヲ知リヌト。公、人ヲシ
テ之ヲ視シメシニ、果シテ、伯玉ナリキ。(列女傳)

二五、スエズ運河

レセツプス
 佛人、一八〇
 五年生、一八
 九九年歿。
 苦心
 稀有
 稀代
 地峽
 海峽
 遇
 遭逢
 スエズの開鑿は、佛國の學士レセツプスが、多年の苦慮を
 費して、成功したる、希有の偉業なり。
 そもく、地中海と紅海とは、この百英里の地峽により
 て阻絶せられ、歐亞弗三洲の交易、これがために妨げられ
 しこと、こゝに、幾千年なりしぞ。されば、いにしへより、この
 障碍を除きて、交通の便を開かむことを謀りたるものは、
 幾人なりしを知らず。されど、遂に、成功の運に遇ひたる

ものあることなかりき。

今を去る、凡、三千年前、埃及國の盛なるにあたり、嘗、一の河道を開きて、漕舟を通ぜしことあり。紀元前四百年代、希臘の、埃及を併有するにおよび、その河道を修治したりき。その後、羅馬衰へ、亞刺比亞の回部の、埃及を侵取せしをり、又、河道修治の擧ありき。この數代の間、に、開修せし河道は、時に従ひて、多少の變遷なきにあらざりしかど、大かた、ニール河を溯りて、紅海の西岸に出づるものにして、河道、甚長く、かつ、その幅、狭きを以つて、大船を出入せしむるに足らざりき。

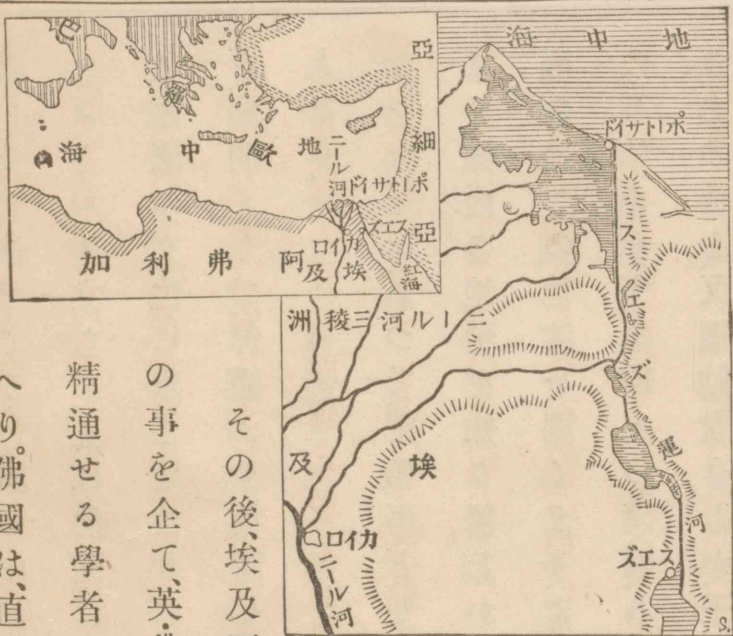
一千八百年代の初、佛帝ナポレオン第一世の、埃及を征

回部
同々教を奉ず
る種族、其の
埃及を侵取せ
しは、六百三
四十年の頃。

服せし時、この地峽を開鑿して、運河を通ぜむことを企て、

地勢を測量せしめしに、
兩海潮面の高低、その差、
百メートルにして、開鑿
すとも、その効なかるべ
しとの議ありしかば、遂
に、その企も止みぬ。

その後、埃及王アラーは、みづから、開鑿
の事を企て、英、佛、兩國に向ひて、地理學に
精通せる學者を、派遣せられむことを、乞
へり。佛國は、直に、承諾せしかど、英國の異



(遺遺)

崩
薨卒死

文化
文明

招聘
招聘

議、いまだ、決せざるに、王は、中途にして、崩ぜられ、ついで、イ
スマール王立ちぬ。王は佛國に遊學せしことありて、深く、
彼の國の文化に感じ居たりければ、即位の後、大學士數人
を、顧問として、佛國より招聘せり。レセップスは、實に、その一
人なり。

說
遊說
異說

レセップス、かつて、總領事として、埃及にありしことあり。
よく、國內の地勢を知り居しかば、若く、王に向ひて、富
國の道、この地峽を開くより、よきはなし。これ、ひとり、一國
の利に止らず、地球上の諸國、みな、その恩惠に浴すべきな
りとの旨を、反覆勸說せしが、王、遂に、決意するところあり、
いかなる障碍ありとも、決して、中絶せざらむ事を盟へり。

措
置

假
借

單身
孤身
獨身

レセップス、感激措くこと能はず、直に、佛國より、地理學者を
招聘して、細しく、測量せしめたるに、兩海の潮面、その高下、
全く、相平均せる事を、たしかめ得たり。こゝに、遂に、これを、
佛國の公議に謀り、その助を假りて、この大業を大成せむ
とせり。たまく、佛國の公議は、この事業の、ひとり、天然の
困難あるのみにあらずして、更に、國際間の、非常なる困難
あるべきことを説きて、たやすく、この議に同ぜず。

レセップスは、本國の議、かくの如くなるを聞き、奮然とし
て起ち、つひに、一身をもて、事に當らむと、決心せり。先、單身、
土耳其にゆき、諄々として、開鑿の、必、著手せざるべからざ
る所以を説きて、その國議を定め、更に、英國に赴き、反覆辯

捐金
釀金

纏綿
纏絡

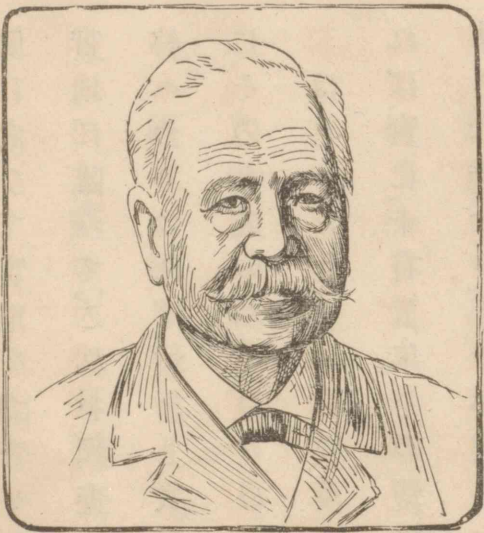
端緒
發端

緩漫
遲緩

論して、遂に、その承諾を得たり。それより、諸國を歴説して、
 懇に、その利害得失を辨じ、猜忌の念を釋きて、協同の心を
 ひらきたるに、いづれも、皆、贊同の意を表せり。こゝに、埃及
 國、その主となり、佛國、これを助け、他の諸國も、亦、これが捐
 金をなすなど、レセップスの志業は、漸、その緒に就きぬ。

諸種の困難は、開鑿の困難と共に、レセップスの一身に纏
 綿し來れり。その困難とは、いかに。開鑿の業、著手せられて
 より數年、いまだ、その成功の端緒をだに見ざれば、各國の
 物議は、囂然として起り、或は、その業の緩漫なるを謗り、或
 は、その業の不成功を議するもの、ひきもきらず。また、開鑿
 場にては、未開の地のならひ、器械の用意も、十分ならずし

艱苦
困苦
辛苦



て、百事、みな、意の如くなること能はず。ことに、一帯の地茫
 茫たる、沙漠の原野にして、炎暑、まことに、焼くが如くなれ
 ば、場中二萬の役夫は、日夜、そ
 の艱苦を訴へて、やまず。内外
 の攻撃は、斯の如くにして、皆、
 レセップスの一身に集り、その
 心勞、實に、いふべからざる上
 に、志かも、第二の困難は起れ
 り。そは、資金の缺乏なり。

レセップスは、この間に立ちて、少しも、たわまず。いよく、
 勉勵して、工事を督し、孜孜として、業務をつとめたりき。さ

誣罔
讒誣

乞
請

流言
飛語

想
思憶懷

れど、各國の謗議は、ますます、その勢を得、誣罔、こもごも、起りて、また、いかにともすべからざるに至りしかば、遂に、各國に向ひて、實地を調査せむことを乞へり。各國の委員等、實地に臨みて、これを調査せし頃には、土功はや、その半を終へたりければ、流言も、次第に衰へ、資金も、從ひて集り、遂に、その大成の功を見るに至れり。

はじめ、レセップスの、埃及王に建言せしより、歲月を數ふれば、實に、十有五年、その費用を算すれば、實に、八千萬弗の多きに達せり。その事業の大なる、想ひやるべく、レセップスの堅忍、亦、仰ぐべきなり。(仄米邦武—米歐回覽實記)

二六、太平洋 (天和田建樹)

怒る波、さかまく潮、 打たば打て、襲はば襲へ。

龜の住む、島と榮えて、 苔のむす、巖と立ちて、

はてもなき、太平洋の、 海原に、輝ぎ出でし、

日の本つ國。」

人の世は、變り行けども、 變らぬは、海原の色。

國の様、移り行けども、 うつらぬは、波風の聲。

ひと筋の、天つ日嗣を、 戴きし、國は、動かじ。

千代に八千代に。」

言とはむ。太平洋の、 海遠く、あそぶ嵐よ。

かくの如、動かぬ國は、 天地に、たぐひありやと。

神代より根ざし堅めて、君と臣、ひとつ心の、

國はこの國。」

夜はあけぬ。年は反りぬ。

鏡なす、初日の影は、

亞米利加の岸まで續く、

海原に、浮び出でたり。

誰か見て、仰がざるべき。

國民の、心もならへ。

光みがきて、

二七、洋式造船術の起原

アダムス
後、歸化して、
三浦安針と改
名す。

わが國にて、歐羅巴風の船舶を造れることは、慶長のころ、東照公の顧問に備れる、英吉利の人アダムスが、伊豆の狩野川尻にて造れるぞ、はじめなりける。この船は、京都の

羅馬へ遣し
慶長十八年出
發、元和六年
歸朝す。

大猷公
徳川三代將軍
家光。

慎徳公
徳川十二代將
軍家慶。

安政
孝明天皇の時

田中庄助・朱座立清等、公命により、後に、漂著せし西班牙人を乗せて、新西班牙のアカプルコーに往きけりとぞ。その後、伊達政宗が、支倉常長を、羅馬へ遣しし時、仙臺にて、新に、船をつくらしめきといへば、當時は、造船の術も、やゝ、開けつるならむ。大猷公、外教を禁ぜむがために、海外に往來する事を停められしをり、造船の法にも、制限を立てられしかば、船といふ船は、いづれも、纔に、近海を航するに堪ふる物のみとなりしを、慎徳公の頃、歐・米人の來れるより、又、造船の術は開けたり。今、その起原につき、大要をいはむ。

安政元年十一月四日、伊豆・相模・駿河あたりは、大地震ありて、海嘯さへつよかりけり。伊豆國の下田港も、この浸水

覆
顛

消息
音信

修繕
修理

の難にかゝりて、市街は、殆、荒原となりにき。この時、露西亞の軍艦フレガットデイアナ號といふが、港に、船がかりして、この災に遇ひ、艦は、暗礁に觸れて、覆らむとせしを、船人等が、いたく、力を盡ししによりて、纔に、沈没の患を免れけり。この頃、露西亞は、歐羅巴の國々と、戦争のなかばにて、消息を通ぜむ術なきのみならず、もし、英吉利の軍艦に出であはば、捕獲せられむ恐ありとて、船人等は、いとく、困難を極めたり。かくて、船人等は、幕府に請ひ、つひに、同國戸田港にて、破船を修繕せむとし、下田港を出でて、伊豆岬を乗り廻る時、海水、船底より侵入して、防ぎ止めむやうなく、船は、見るく、千尋の底に沈みしが、船人等は、端艇に乗り移り、

鍛段(假暇)

奮勵
勉勵
勵精
勉強

指導
教導
指揮

辛うじて、死を免れぬ。船人等は、重ねがさねの天災にも屈せず。更に、幕府に請ひて、木材は更なり。船匠、鍛工をも借り、日夜、奮勵して、二隻のスクーネル船を造りをへ、遂に、この船に乗りて、西比利亞地方に歸りぬ。その後、露西亞政府は、この一隻の船を、幕府に贈りて、厚く、當時の恩を謝しきといふ。

この時、露西亞人に備はれて、工事を助けし、わが國の船匠、鍛工等は、實地の指導によりて、その製造の上に得たる知識、少からず。さて、この後、これらの職工が、幕府の命を受けて造りしは、即、第一より、第三に至れる君澤形なり。抑、わが國人が、始めて、歐羅巴風の造船術を傳へしより、

擊
討伐

指を屈すれば、なほ、五十年にも足らざるには、やくも、わが軍艦は、外國人の力を借らで、世界の各港に、日章の旗を翻し、東洋に雄を稱せし支那の艦隊をさへ、ただ、一戦に、撃ち沈めて、その全力を失はしめたるなど、實に、驚くべき進歩と、謂ひつべきなり。かく、物質的の事業の進歩するは、偏に、精神的の運用によれば、實に、重んずべきは、精神教育の力なりけり。あはれ、太平洋の濤をわけ、喜望峰の頂を仰ぎし、古人の事蹟に恥ぢざる、有爲の人人が、今より輩出して、わが國旗の光を、世界に輝さむことを、老のこゝろの、一すぢに、こひ願ふのみ。(勝安芳)

古人の事蹟
一四八六年、
西班牙人バ
ソロミュー、
テアス喜望峰
を發見し、一
五二〇年、同
國人マゼラン
世界一週を企
つ。

二八、 威海衛陥る その一

我が海軍は、既に、敵の艦隊を、黃海に破り、陸軍も、また、旅順口を陥れ、金州半島、悉、わが手に落ち、敵艦、退いて、纔に、威海衛を保つのみ。我が軍は、更に、進んで、これを陥れむと欲し、大連灣にて、盛に、陸海兩軍の準備を整へたり。

かくて、陸軍は、海軍に護送せられて、明治廿八年一月廿五日、榮城灣より上陸し、直に、榮城を陥れて、威海衛に進めり。敵の水師提督丁汝昌は、自、定遠に乗りて、來遠、濟遠の諸艦を率ゐ、海岸に近づき、陸上の兵を助け、巨砲を發ちて、大に、我が軍を惱せり。されど、我が軍の猛烈なる吶喊に逢うて、陸上の敵兵、遂に、支ふること能はず、諸砲臺を棄てて、悉、

陥(焰)蹈(稻)

師(帥)

猛烈
激烈

潰走せり。我が海軍の諸艦より、選拔せられたる水兵五十餘名は、直に、上陸し、陸軍に代りて、各占領砲臺の守備に任じ、その備砲を應用して、海上なる帝國艦隊と、相應じ、劉公島に向つて、砲撃を加へたり。

掌大
豆大
椽大

此の四面重圍の中にありて、丁汝昌は、巧に、その艦隊を操縦して、よく、掌大の孤島を守り、旬餘日に互りて、毫も、屈せず。益、勇敢なる抵抗を持續したり。且、港口には、一面に、防材を布設したれば、我が艦隊も、進むによしなく、まづ、これを破壊せむことを企て、二月三日の夜、六號水雷艇を、威海衛の東口に進航せしめたり。我が艇の、漸、防材に達せし頃、敵の哨艇たる、七隻の水雷艇は、直に、我が艇の潜行を發見

自若
從容
潛
窃密竊

伊東司令長
官
祐亨

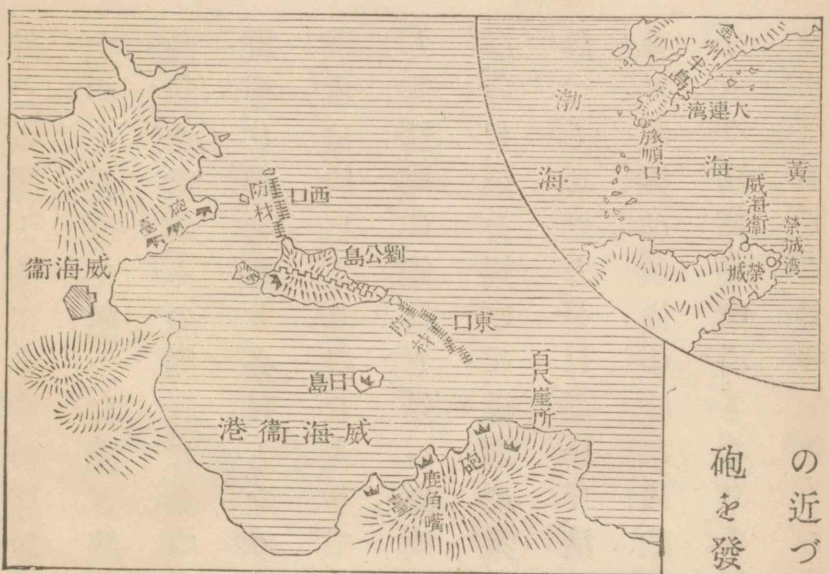
し、四方より、これを圍みて、砲丸を雨射し、日島砲臺よりも、また、速射砲を放ちて、これを防げり。されど、我が艇員は、少しも、驚かず。自若として、四邊を凝視し、終に、防材の一端に於いて、航路を發見し、潛に、その内に入り、三度、擲爆薬を使用して、防材の一部を破壊し、その任務を完うして、歸れり。伊東司令長官、此の報を得て、大に、喜び、第一水雷艇隊、第二水雷艇隊、第三水雷艇隊の司令を、旗艦松島に召集し、令を下して曰はく、余は、今、諸君に命ずるに、港内に突進して、敵艦を轟沈すべきことを以つてす。抑、水雷艇の、港灣に突進するは、各國海軍の、未、嘗試みたることなきことにして、實に、難中の難事なり。諸君、願はくは、一命を國家に捧げて、

更 書信
改 信書
俊

帝國海軍の名を、世界に輝かされよ」と司令等は、快く、これを諾し、まづ、諸艇長を率ゐて、岸に上り、陸上より、よく、敵艦の位置を視察し、艇に歸りて、悉書信を焼き、衣服を更めて、靜に、夜のふくるを待てり。

五日、午前三時、月落ち、海暗きに乗じて、第二、第三の水雷艇十隻は、徐々と、東口に進み、防材を越ゆるに及び、急に、全速力を出して、港内に突進せり。港口なる敵の哨艇は、これを覺りて、火箭を打上げれば、諸艦、みな、水雷艇防禦の用意をなせり。

敵の旗艦定遠にては、汝昌、その參謀の一歐人と共に、艦橋に出で、暗中を透して、四方を望み居りしが、忽、我が艇隊



の近づくを見て、榴霰彈を放ち、又、機砲を發して、盛に、彈丸を飛ししが、我

が艇隊の一隻は、艦首の方より、二隻は、艦尾の左右より、まつしぐらに、突進して、早くも、數百メートルの距離に迫れり。此の時、定遠の放てる一彈は、我が九號艇に命中し、一團の汽煙、闇を破つて上騰せり。されども、數秒時を出でざるに、轟

命中
鵠中

最後
最期

然たる響と共に、定遠の艦體、劇しく震動し、瀑の如き水柱、空中に迸りて、艦上に灑ぎ懸れり。これ、正しく、我が一發の魚形水雷の、その艦底に命中して、爆發したるなり。艦員は、縦横に、馳せ廻り、必死となりて、防禦に勉めたれど、渦巻く潮水は、艙口より迸り入りて、下甲板の浸水、既に、一尺に達し、艦體、遂に、傾斜し始めぬ。汝昌は、はや、これまでなりと思ひ、急に、錨を揚げて、淺瀬に乗り上げしめ、艦員をして、悉く陸せしめたり。是に於いて、清國無雙の堅艦として、武威を東洋に振ひ、黃海の戦には、我が本隊に當り、威海衛にありても、亦、防禦の中心となりて、屢、わが軍を悩したる定遠も、遂に、はかなき最後を遂ぐるに至れり。

旋回
回轉
奮戰
激戰
力戰

我が軍は、此の勢に乗じて、第二の攻撃を企て、五日の夜、第一艇隊の五隻、東口より闖入せむと志たれど、敵の警戒、嚴なれば、先、第二、第三艇隊をして、故に、西口より突進する状をなさしめ、六日、午前四時、月の落つるを待ちて、靜に、防材附近に達せり。敵は、昨夜の攻撃に懲り、電氣燈を旋回して、海面を照し、又、各艦、代るく、發砲して、相警戒せり。我が艦隊は、一時、悉、防材に乗り揚げしが、漸、港内に入り、奮戦して、皆、水雷を發射し、終に、來遠、威遠、寶筏の三隻を撃沈し、各艇、一兵をも損せずして、恙なく、本隊に歸著せり。

二九、威海衛陷るその二

肅然
寂然
闕然
轟々
般々

我が水雷艇の突進、その効を奏し、敵勢頓に挫けたるを以つて、伊東司令長官は、此の機に乗じ、總艦隊を擧げて、敵軍を攻撃せむと欲し、二月七日の早朝、艦隊を二分し、本隊及び第一游撃隊の八隻は、劉公島の東北より、その東端砲臺に向ひ、第二游撃隊及び第三游撃隊の十四隻は、東口の東方より、日島砲臺に向ひ、共に、單縱陣を布きて、進航せり。やがて、戦鬪の號音と共に、各艦の大檣頭には、開戦を示せる大軍艦旗を掲げ、兵員皆、その部署に就けり。滿艦、肅然として、一人の言語を交ふるものなく、唯、波浪を蹴る轉輪の轟々たる響を聞くのみ。

既にして、劉公島に向へる、我が本隊、六千メートルの距

迅擊
急擊
崖
岬

離に近づくや、敵の砲臺、まづ發砲し、我も亦、これに應じて、迅擊を加へたり。砲臺は、忽、黃煙に包まれて、著彈處々に、爆發し、閃光、四邊を射て、壯觀、いふべからず。日島に向へる一隊も、また、直に、戦を開き、陸上の我が軍も、百尺崖附近の諸占領砲臺より、日島を砲撃せり。鎮遠以下の敵艦は、頻りに發砲して、砲臺を助け、兩軍の砲聲、殷々として、天に轟き、海陸一帶、硝煙の中に没し、日色、爲に、朦朧たり。既にして、日島の火藥庫、我が砲撃を被りて、爆發し、その砲臺は、遂に、復、用ふべからざるに至れり。

九日、我が占領砲臺の一なる、鹿角嘴砲臺より、放てる彈丸、敵艦、靖遠に命中して、これを貫き、遂に、沈没せしめたり。

集
聚蒐輯

敵兵も亦自なかば沈没したる、定遠を破壊し、將士復戦ふ意なし。汝昌、憂慮措く能はず、兵士を集め、これを諭して曰はく、將となり、卒となるも、國に盡すは、一なり。敵彈、豈人を選びて殺すものならむや。死生、皆天にあり。願はくは、諸子、君恩を忘れず、つとめて、力戦せよ。援軍の來る、將に、遠きにあらざるべし」と。爾來、汝昌、戦ふごとに、自、彈丸雨注の中に立ちて、大に、決する所ありきと、いふ。

此の時、劉公島にありし敵の陸兵は、海軍營に迫り、軍艦を奪ひて、逃走せむことを企つ。水兵も、亦、既に、士官の命を用ひず。島中の混亂、實に、名狀すべからざるに至れり。こゝに於いて、艦隊の諸將校、こもごも、提督の室に至り、全艦隊

慟哭
號泣
涕泣

の水兵、離反して、また、用ふべからざるを訴ふ。汝昌、慨然として、曰はく、子等の部下、汝昌を殺さむと欲せば、速に、殺せ。われ、何ぞ、生を惜まむや」と。一坐、面を掩ひ、感極つて、慟哭するものあり。汝昌、すなはち、一歐人を遣し、兵士等に説かして、曰はく、汝等、須らく、最後の、一快戦を試み、刀折れ、彈盡きて、後に、敵に降るべし。然らば、日人、必、その忠義に感じ、禮を以つて、汝等、を遇すべし。汝等の名譽と、生命とを、兩全ならしむる策、唯、これのみ」と。あかれども、兵士等、遂に、命を奉ぜず。

次いで、十一日、劉公島東端の巨砲、また、我が砲彈の爲に、破壊せられ、汝昌、百計、全く、盡きて、遂に、降を、我が軍門に乞

降
絳
絳
鋒
鋒

策
籌

はざるべからざるに至れり。

十二日、午前八時三十分、清國砲艦鎮北は、白旗を前に掲げ、港口を出でて、我が本隊に近づき、軍使廣丙艦長程璧光我が旗艦松島に到りて、丁提督の書を、伊東司令長官に呈せり。その書に曰はく、

「汝昌はじめ、艦破れ、人盡くるまで決戦せむと、思ひしが、今や、空しく、百千の生靈を奪ふに忍びず。殘艦及び砲臺を、貴軍に獻じて、降を乞ふ。願くは、兵士及び、人民をして、生を完うして、各、その郷に歸らしめむことを。」

伊東司令長官は、快く、その請を容れ、更に、酒果を、軍使に託して、これを、丁提督に贈り、以つて、苦戦の勞を慰せり。

生靈
生命

歸
還反

贈
送遺

十三日、程璧光、喪服を著けて、再、來り、我が司令長官に謁し、悄然として、曰はく、提督は、閣下の情誼に感泣し、我が事終れりとなし、總兵劉步蟾、統領張文宣と共に、藥を仰ぎて、節に殉せり」と。我が將士、これを聞きて、その義烈に感じ、涕泣せざる者なし。伊東司令長官は、特に、命じて、儀式の外は、奏樂を禁じ、以つて、弔意を表せしめたり。又、提督の柩をば、一小船に載せて、芝罘に送ると聞き、大に、これを憫み、清軍の總代牛昶炳を見て、辭を正しくして、曰はく、丁提督は、洵に、忠義の士なり。今、國難に殉して、大義に斃る。若かも、その屍は、粗惡なる一小船に載せられむとす。われら日本武士の、傍觀するに忍びざる所なり。因りて、運送船康濟號は、特

憫
憐

洵
寔誠真

魂
蒐

に、受領せずして、その柩を搭載する用に供せしめ、聊、以つて、提督の忠魂を慰せむ」と、牛昶炳、感極つて泣き、再拜して、恩を謝せり。

齊
均等

ついで、十七日、我が總艦隊は、悉、威海衛港内に入り、收容軍艦を合せて、四十餘隻、齊しく、旭旗を翻し、旗艦松島に起れる、瀏亮たる、君が代の奏樂に和して、各艦の兵士、一齊に、萬歳を唱ふることに、三回、山雲、爲に、裂け、海波亦、爲に、立たむとす。眞に、千古の壯觀なりき。(小笠原長生—帝國海軍史論)

本三丁

矢田スミ子

再訂高等女子讀本卷五終

明治三十九年十一月十九日訂正二十七版印刷
明治四十年十一月三十日訂正二十七版印刷
明治四十一年十一月三十日訂正二十七版印刷
明治四十二年一月三十日訂正二十七版印刷
明治四十二年二月二日再訂再版發行

再訂高等女子讀本

全十册
定價
各金貳拾四錢



校訂者 佐藤球
編纂者 明治書院編輯部
發行者 三樹一平
印刷者 綾部喜久二
東京市神田區錦町一丁目十番地
東京市神田區雉子町三十四番地

發行所

明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

振替貯金口座四九九壹番
電話本局二四三八番



本科第三卷
多田 廿二